

《研究ノート》

近代日本における麦稈真田業の展開

—岡山県の事例—

森 元 辰 昭

はじめに

岡山県浅口市寄島町役場、鴨方町図書館、岡山県立博物館には、同じ「麦稈真田製品」の見本帳が保存されている。戦後に作成されたもので、再び輸出品としての地位を挽回しようと、岡山県の貿易振興課が計画したもので、「見本帳」には実に121もの編み方が示されている¹。

言うまでもなく麦稈真田は、主として帽子製造の原料または半製品で、一大消費地のイギリス、フランス、アメリカなどの帽子の流行に左右されて、その編み方に工夫をこらし、競争相手のイタリアやスイス、中国を凌いで世界で認められたものである。それだけに、漂白から染色、編み方に関しては絶えず研究・工夫が重ねられた。欧米の流行に関する情報は、貿易港に営業所を置く外商や日本人商社・問屋による直接入手を始め、在外領事による現地報告（「官報」に掲載）や貿易港である神戸・横浜での貿易に関する大蔵省主税局の「外国貿易概欄」など、さらには各国「万国博覧会」見学（これには問屋による出品を含む）などによった。

麦稈、経木、麻を原料とした真田紐の生産は、明治以降急速な発達をとげ、重要輸出品に指定されて政府の奨励産業となった。その発展過程に関する研究は、神立春樹氏の研究によれば²、戦前期当該産業が隆盛を極めていた大正10年代までに盛んに行われ、実務書を含め多くの成果をあげているが、産業史研究が本格的に展開されるようになった戦後でも、麦稈真田工業史を対象とした研究は皆無の状態であり、わずかに自治体史の編纂過程で取り上げられるに過ぎない³。なぜ産業史で取り上げられないのか、その一端を表1で確認しておきたい。見られるとおおり、麦稈真田が輸出総額に占める割合は、明治30年代になってやっと1.0～1.8%であり、重要輸出品に指定されたといっても全体からみればこの程度の産業であり、日本産業を代表するとはとても言えないことが要因の一つであろう。しかし、産地の事情から言えば、農家の副業としてこれほどの広がりや利益をあげることができた産業は他にないのも事実である。

さて神立春樹氏の研究に関しては、『地方史研究』の「新刊案内」で記したところである⁴。そこでの課題に関しては、「文献と統計」を網羅しそれによる麦稈真田工業史を明らかにされているが、「新たな原資

1 元岡山県立博物館長の田村敬介氏のご教示によれば、制作者は鴨方町六条院の山下ヤク氏で、彼女は岡山で国体が開催された時（昭和37年）、昭和天皇の前で麦稈真田の編み方を実演し、天皇からどこで繋いであるのか判らないとお褒めの言葉をいただいたとのことであった。写1が見本帳である。

2 神立春樹『近代日本の麦稈真田業－文献と統計』『近代日本における麦稈真田業』（教育文献刊行会、2013年）

3 自治体史の主なもの挙げると、『寄島町史』（昭和41年）、『岡山県史』（近代Ⅱ、昭和62年）、『鴨方町史』（本編、史料編、民俗編－昭和62～平成5年）、『金光町史』（本編、史料編、民俗編－平成10～15年）、『倉敷市史 6』（近代下－平成16年）I）、『笠岡市史』（第Ⅲ巻－平成8年）などがある。

4 拙稿『地方史研究』374 第65巻第2号（2015年4月）p.123-126

なお、古島敏雄「産業資本の確立」（岩波講座日本歴史17、近代4、1963年）で、「主要工産物生産額輸出入額」の表で、繊維製造・加工業（綿糸紡績・生糸・織物）が全生産額の52%を占め麦稈真田を含む「竹・木・藁加工」はわずかに2.1%を占めるに過ぎないことを明らかにし、「小規模作業場、家内工業の比率が全経営体の90%を超えるものは生糸・真綿・織物・煉瓦及び瓦・皮革・和紙・油類・樟脳薄荷・藍漆液。醤油・製茶・漆器・畳表ゴザ類・麦稈経木真田の各製造業であり、その大部分が99%に近い」（p.215-217）としている。

料によるものではない」とされ、新資料の発掘を囑望される。さらに生産を主とした分析であり、流通過程に関しては『明治大正国勢総攬』によって輸出額統計を用いた分析にとどまっており、流通の担い手たる貿易商や問屋、仲買商などについては殆ど言及されていない。

本稿は、主として神戸港の「外国貿易概欄」や「官報」に掲載された在外領事の報告を資料に、イギリスやアメリカ（北米合衆国）で日本製麦稈真田がどのような評価を受け、売買されたのか、この外国貿易につながる流通過程が如何なる商人によって為されたのか、さらには「博覧会」や国内での品評会などの状況を明らかにすることを目的としており、岡山県地域の事例をもとに神立氏研究の闕を埋めることを意図している。研究ノートの所以である。近代日本の麦稈真田業を最初に導入した東京大森の製造業に関しては、『近代日本における麦稈真田業』の「麦稈真田業の成立と推移」を参照されたい。

はじめに表2によって麦稈真田の生産量と金額について概観しておきたい。わが国統計史上で麦稈真田業の生産量と価額を知りうるのは明治20年からである。明治20年代の産地形成期を経て、明治30年代からは大きく成長し、麦稈真田ばかりでなく明治33年から経木真田（及び麦稈・経木混成真田）、大正元年からは麻真田が加わり真田紐の60%～80%を占めるようになる。ただし、麻真田は輸入のマニラ麻を原料としており、全て機械織りの工場生産であり、手工業製品の麦稈真田・経木真田とは異なる。経木真田は、高級な真田紐とは言えず、一時流行するものの大正9年（1920年）の戦後恐慌以後急速に衰退に向かう。麦稈真田は、昭和恐慌の昭和5・6年を境に衰退し、戦時体制下ではイギリスが極端に減少し、アメリカに集中する一方、新たな貿易相手国として中南米が大きな位置を占めることになった。なお、ここで麦稈真田の単位について記しておこう。1反=18ヤード、繰棒に6列9重に巻きつけ1束となる。

以上の概観を踏まえ、時代を追ってやや詳しく見ることにする。

表1 主要輸出品の構成

単位：千円

年	輸出総額	麦稈真田	蔦蔴	生糸	製茶	綿糸	絹織物	マッチ	陶磁器
1887	51,700	350	36	19,280	7,603	0	321	942	1,312
1892	71,326	155	1,117	36,270	7,525	8	3,757	2,202	1,480
1897	219,301	3,181	3,233	55,630	7,860	13,490	9,853	5,642	1,819
1902	271,731	3,234	6,772	76,859	10,484	19,902	27,399	9,170	2,462
1907	494,467	5,001	5,743	116,889	12,618	30,343	31,754	9,446	7,216
1910	618,922	9,096	3,753	150,321	13,464	53,680	30,101	12,044	5,451
1917	1,035,811	18,171	2,468	355,155	21,756	108,139	62,858	24,586	14,474
1922	1,890,308	11,294	3,341	670,047	17,829	114,723	107,928	15,563	21,211

注) 神立春樹『近代蔦蔴業の展開』（お茶の水書房、2000年）p.77より作成

割合（%）

年	輸出総額	麦稈真田	蔦蔴	生糸	製茶	綿糸	絹織物	マッチ	陶磁器
1887	100.0	0.7	0.1	37.3	14.7	0.0	0.6	1.8	2.5
1892	100.0	0.2	1.6	50.9	10.6	0.0	5.3	3.1	2.1
1897	100.0	1.5	1.5	25.4	3.6	6.2	4.5	2.6	0.8
1902	100.0	1.2	2.5	28.3	3.9	7.3	10.1	3.4	0.9
1907	100.0	1.0	1.2	23.6	2.6	6.1	6.4	1.9	1.5
1910	100.0	1.5	0.6	24.3	2.2	8.7	4.9	1.9	0.9
1917	100.0	1.8	0.2	34.3	2.1	10.4	6.1	2.4	1.4
1922	100.0	0.6	0.2	35.4	0.9	6.1	5.7	0.8	1.1

1. 明治20年代の岡山県麦稈真田の生産と流通

(1) 岡山県における二大産地の形成

岡山における麦稈真田業の起源は、1882（明治15）年上房郡長の時任義当が勸業主任の板倉信古とはかり、中村三平を東京府荏原郡大森に派遣して技術を取得させて、帰郷後高梁に工場を設置したことが嚆矢である。『高梁市史』によれば、板倉信古は、豪商中村源蔵ら郡内有志から100円の募金を集め源蔵の女婿

表2 「FOREIGN TRADE of Japan A Statistical Survey」 真田 Plaits

単位：1000束 1束=60ヤード（1ヤード=91.4cm）

年次 year	西暦	麦稈製 Straw			経木製 wood-shaving			麻製 Hemp			其の他 Other			合計 Total		主な出来事
		生産量 反	価額 円	割合 %	生産量 反	価額 円	割合 %	生産量 反	価額 円	割合 %	生産量 反	価額 円	割合 %	生産量 反	価額 円	
明治20年	1887年	1,232	350,450	100.0										1,232	350,450	
明治21年	1888年	992	268,557	100.0										992	268,557	
明治22年	1889年	668	146,847	100.0										668	146,847	
明治23年	1890年	425	87,196	100.0										425	87,196	
明治24年	1891年	747	193,777	100.0										747	193,777	
明治25年	1892年	646	155,162	100.0										646	155,162	
明治26年	1893年	1,253	378,349	100.0										1,253	378,349	
明治27年	1894年	2,062	743,399	100.0										2,062	743,399	日清戦争
明治28年	1895年	3,478	1,387,643	100.0										3,478	1,387,643	下関条約
明治29年	1896年	5,496	2,234,354	100.0										5,496	2,234,354	
明治30年	1897年	6,760	3,181,915	100.0										6,760	3,181,915	
明治31年	1898年	5,961	2,404,003	100.0										5,961	2,404,003	
明治32年	1899年	7,134	2,770,178	100.0										7,134	2,770,178	
明治33年	1900年	8,802	4,025,159	96.7	355	138,115	3.3							9,157	4,163,274	北清事変
明治34年	1901年	6,974	2,989,836	92.4	552	244,238	7.6							7,526	3,234,074	
明治35年	1902年	8,611	2,938,858	86.4	1,330	464,390	13.6							9,941	3,403,248	
明治36年	1903年	10,312	3,787,062	75.2	2,941	1,246,591	24.8							13,253	5,033,653	
明治37年	1904年	12,499	5,165,612	79.4	3,060	1,336,826	20.6							15,559	6,502,438	日露戦争
明治38年	1905年	9,590	3,221,122	59.1	3,423	1,626,873	29.8				1,185	605,986	11.1	14,198	5,453,981	ポーツマス条約
明治39年	1906年	12,255	3,562,695	75.5	3,150	1,143,859	24.3				48	9,984	0.2	15,453	4,716,538	
明治40年	1907年	12,693	3,905,538	78.1	3,414	884,205	17.7				803	212,087	4.2	16,910	5,001,830	
明治41年	1908年	11,601	3,179,890	80.5	2,153	455,925	11.5				1,067	312,402	7.9	14,821	3,948,217	
明治42年	1909年	17,001	4,634,261	72.7	6,572	1,609,315	25.2				480	130,590	2.0	24,053	6,374,166	
明治43年	1910年	22,921	5,962,189	65.6	13,108	2,833,532	31.2				1,513	299,791	3.3	37,542	9,095,512	韓国併合
明治44年	1911年	18,150	4,492,338	70.2	10,299	1,677,844	26.2				1,197	224,886	3.5	29,646	6,395,068	
大正1年	1912年	24,432	6,080,534	35.1	24,578	3,444,041	19.9	14,397	7,260,264	41.9	3,160	553,202	3.2	66,567	17,338,041	
大正2年	1913年	18,031	4,198,913	26.8	9,779	1,221,369	7.8	23,612	10,064,706	64.1	987	206,263	1.3	52,409	15,691,251	
大正3年	1914年	13,177	2,608,076	18.2	5,802	639,897	4.5	27,066	11,102,382	77.3	45	4,707	0.0	46,090	14,355,062	第一次世界大戦
大正4年	1915年	10,466	1,763,605	12.5	3,931	340,079	2.4	38,127	12,023,755	85.1	4	4,078	0.0	52,528	14,131,517	
大正5年	1916年	16,381	3,043,401	18.7	5,599	547,785	3.4	39,776	12,601,626	77.2	176	125,602	0.8	61,932	16,318,414	
大正6年	1917年	16,984	4,242,248	23.3	8,030	1,065,491	5.9	32,760	12,836,852	70.6	13	26,580	0.1	57,697	18,171,171	ロシア革命
大正7年	1918年	13,078	3,799,248	31.7	3,331	468,459	3.9	20,721	7,718,854	64.3	24	9,557	0.1	37,154	11,996,118	
大正8年	1919年	20,712	11,496,483	57.4	6,105	1,525,347	7.6	18,668	6,992,757	34.9			0.0	45,485	20,014,587	ヴェルサイユ条約
大正9年	1920年	18,613	14,685,507	66.9	3,553	1,463,381	6.7	14,045	5,731,688	26.1	45	80,312	0.4	36,256	21,960,888	戦後恐慌
大正10年	1921年	6,243	2,883,761	37.8	83	18,299	0.2	15,187	4,728,904	62.0			0.0	21,513	7,630,964	
大正11年	1922年	11,323	4,459,405	39.5	708	124,971	1.1	18,705	6,708,544	59.4	2	804	0.0	30,738	11,293,724	
大正12年	1923年	9,168	3,665,729	36.7	419	147,600	1.5	15,759	6,166,366	61.8	10	1,503	0.0	25,356	9,981,198	関東大震災
大正13年	1924年	9,924	3,570,322	38.9	38	12,586	0.1	17,142	5,587,943	60.9			0.0	27,104	9,170,851	
大正14年	1925年	9,498	4,459,026	36.3	52	21,239	0.2	19,749	7,814,690	63.6	4	1,578	0.0	29,303	12,296,533	
昭和1年	1926年	7,369	3,453,220	33.4	66	25,590	0.2	17,572	6,851,728	66.3			0.0	25,007	10,330,538	
昭和2年	1927年	7,532	3,020,134	35.7	102	43,931	0.5	12,045	5,383,515	63.6	15	12,301	0.1	19,694	8,459,881	金融恐慌
昭和3年	1928年	5,936	2,192,470	46.5	158	59,587	1.3	5,631	2,458,786	52.1	11	6,290	0.1	11,736	4,717,133	
昭和4年	1929年	7,222	2,886,594	55.7	134	36,859	0.7	4,592	2,250,415	43.4	23	11,762	0.2	11,971	5,185,630	世界大恐慌
昭和5年	1930年	4,480	1,594,471	46.0	33	12,884	0.4	3,703	1,853,012	53.5	9	6,196	0.2	8,225	3,466,563	昭和恐慌
昭和6年	1931年	3,583	917,508	50.4	63	20,748	1.1	3,338	874,649	48.0	17	8,006	0.4	7,001	1,820,911	満州事変
昭和7年	1932年	5,024	1,357,381	42.0	103	39,173	1.2	7,846	1,779,793	55.1	118	52,055	1.6	13,091	3,228,402	
昭和8年	1933年	6,590	2,158,256	30.0	118	28,519	0.4	14,129	4,946,444	68.7	153	71,354	1.0	20,990	7,204,573	国連脱退

注)「日本貿易総覧」(東洋経済新報社, 1935年)による。

中村三平を派遣，半年の伝習を終え明治18年8月に麦稈会社を創設したが，赤字続きで家財を失い一家を挙げて神戸に移住，貧窮の中で源蔵も死去したという⁵。「三平」は「さんぴら」という名称で麦稈真田の最も単純な編み方の名称となっている。

この年に大坂の商人であった原田伊之助が上房郡松山村に工場建設を始め，明治23年に「第二原田麦稈製造工場」が竣工し，本格的な製造が始まった。この高梁地区における麦稈真田の特長は，大麦を原料とした「細莖真田紐」で主としてアメリカ向けの製品となった。これに対し，浅口郡寄島村の頃末勝吉，楠田佐市，葛川喜平の3人が1885（明治18）年にアメリカへの輸出ルートを開拓し，神戸港から輸出した。この寄島村地域で拡大したのは，原料を裸麦の「小髭傾（コビンカタギ）」を利用した「太莖真田紐」別称「割稈真田」で，明治末期には裸麦の「矢筈（ヤハズ）」に転換した。この高梁・松山地区を中心とする「細莖真田」と浅口郡寄島村を中心とする「太莖真田」が岡山県の二大産地を形成することになった。

(2) 『神戸港外国貿易概覧』に見る明治20年代の生産・流通

神立氏の研究データは、『岡山県統計書』明治32年から始まる。それ以前，「神戸港外国貿易概欄」（以下「外国貿易概覧」と約す）で明らかにされる外国貿易の実態は，明治23年以後であったが，岡山県での生産及び流通の把握は、『岡山県勧業年報』『岡山県農工商年報』による以外にはない。

「外国貿易概欄」の最初（明治23年）の記事には，麦稈真田の輸出に関し，21年22年と連続して減少していることを指摘，その主たる原因が「麦作ノ損害」による「原料ニ不足」を来していること，神戸港から輸出する麦稈真田の製産は，「大抵備前備中二州ノ製」に関係しているが，麦作の凶作により原料不足となり，米国向けの上等品が減少したことにあるとしている。ここに麦稈真田の等級について言及しているが，それによれば長さ60ヤード，幅8mmが一級品，10mmが二級品，12mmが三等品で，明治23年度の価額はそれぞれ65銭，40銭，35銭であり，上等品は幅の細い物であった。しかし「麦稈真田ハ単ニ細キヲ主トスル耳ナラス柔軟ニシテ且光沢アルヲ貴ヘリ 支那製ハ堅牢ナレトモ光沢ナク多少黒色ヲ帯ヒテ柔軟ナラス」，したがって低廉な価格で販売されるので，上等品の競争は，イタリア，スイスなどヨーロッパなどの主産国と，低廉な製品は清国との競争に晒されることになる。この最初の報告は以下の通りである。

【史料1】外国貿易概覧（大蔵省主税局）

明治23年（p.146-147）

其三十二 麦稈真田，麦稈器

二十三年ニ於ケル麦稈真田，麦稈器ノ輸出原価ハ拾万式千六百四円ニシテ之ヲ昨年ニ比スレハ五万式千九百拾六円即チ三割四分ヲ減少セリ而シテ輸出仕向国ハ合衆国，英吉利，仏蘭西其他ノ各国ナリ即チ左ノ表ノ如シ

麦稈真田，麦稈器ハ昨年既ニ拾万式千六百七拾四円ヲ減ジ本年又前示ノ如キ退額ヲ告ケタリ昨年減退ノ理由ハ客歲行ノ貿易概覧ニ載スルヲ以テ今省キテ此ニ賛セス本年ノ如キハ麦作ノ損害甚シキヲ以テ自ラ其原料ニ不足ヲ致セルモノ是レ輸出減殺ノ主因タル可シ又前年ノ停滞品アリシト云フモ亦与カリテカアラン抑本品ノ仕向地中主タルモノハ米国ニシテ所謂紳士淑女ノ使用多キニ居リ譬ヘハ日本ニ於テ帽子一個分ノ価式拾銭位ナルモ被国ニ到レハ加工裝飾シテ其価壹円五六拾銭ニ達シ而シテ之ヲ東洋品ノ唱言シテ流行シ登刊器ノ如キモ同シク東洋品ト唱ヘ嗜好スト云フ又聞ク処ニ依レハ麦稈真田ノ神戸港ヨリ輸出スルモノハ大抵備前備中二州ノ製ニ係レリ然ルニ本年ハ同地方ノ麦作凶歉ニシテ麦稈ノ少キカ為メ輸出ニ適スル上等品ハ代価騰貴シテ隨テ輸出モ亦減少セリ麦稈真田ハ一本ノ

	二十三年	二十二年	増	減
合衆国	91,686	111,769		20,083
英吉利	5,903	37,159		31,256
仏蘭西	1,202	1,788		586
其他諸国	3,813	4,804		991
計（反）	102,604	155,520		52,916

5 『高梁市史』907ページ。

長サ六十ヤードヲ以テ定度トナシ其幅八ミリメートル乃至十二ミリメートルヲ三等ニ分チ八ミリメートルヲ一等トナシ十ミリメートルヲ二等トシ十二ミリメートルヲ三等トス其幅ノ広キニ準シ価格モ漸次ニ下セリ而シテ四等以下ノ品物ハ其現品ニ就テ価格ヲ定ム（即チ一等乃至三等ハ何錢ノ開キト稱ス一等ヲ準トシ其価ヲ定ム四等以下ハ各別ニ其価格ヲ定ム）ト云フ今昨年ト今年ノ相場ヲ比較スレハ左ノ如シ

等級	二十三年	二十二年
一等（八ミリメートル）	六十五錢	五十錢
二等（十ミリメートル）	四十錢	四十錢
三等（十二ミリメートル）	三十五錢	三十五錢

麦稈真田ハ単ニ細キヲ主トス耳ナラス柔軟ニシテ且光沢アルヲ貴ヘリ支那製ハ堅牢ナレトモ光沢ナク多少黒色ヲ帯ヒテ柔軟ナラス是其代価ノ常ニ低キ所以ナリト云フ

又真田器ハ大抵小箱ノ類ニシテ其種類ハ四角三角六角等アリテ各三箇ツ、組込ムモノ多シ本年ハ該品ノ輸出甚少シ神戸港ヨリ輸出スル麦稈器ハ但馬ノ湯島地方ニ於テ製出スルモノ多シト云フ

24年の神戸港よりの輸出状況で注目されるのは、輸出に占めるアメリカ合衆国の高さである。実に9割を占めているが、イタリア、スイス国が麦作不況により原料不足に陥り輸出が減退しており、アメリカ向けの輸出が急増した。とりわけ婦人用手提製造のための麦稈真田の輸入に加え、従来男子用帽子の原料であったが、近年は婦人用装飾帽子にも利用されるようになった。したがって上等品の需要が増加したが、その時アメリカ商人の評判が高かったのが「大阪原田製麦稈真田」で「米人ノ賞需スル所トナリ随テ其輸出高モ次第ニ多キヲ加フト云フ」とし、神戸港から輸出される麦稈真田の70%が原田製であるとしている。また、この報告には原田製真田と備中産真田の価格を比較しているのので、ここに示しておこう。1束（1反）当たり10銭の差が示されている。

長さ60ヤード	幅5mm～8mm	65銭	備中産55銭
	幅8mm～10mm	52.5銭	42.5銭
	幅10mm～12mm	42.0銭	32.5銭

翌明治25年にはアメリカ合衆国への輸出が減退している。堅牢で低廉な清国産麦稈真田に押されたため、この種の真田は中等以下の帽子に使用される。日本産は質が軟弱でかつ比較的高価なことが敬遠される原因であったが、今ひとつ、桑港（サンフランシスコ）駐割領事によれば「一梱中ニ異様品ヲ混同シアリテ不揃品多キニアル」ことが不評の原因であった。

逆にイギリス向けの製品は大幅に増加しているが、組方の改良により「旧形ヲ一変セシカ是レ蓋該国ニ於ケル顧客ノ嗜好ニ適シ」たことが挙げられ、さらに価格も低価格になっていることがあった。即ち、上等品相場は1反5～8mmが65銭から45～50銭へ、8～10mmが52銭から40銭へと大幅に低下していることが輸出増加の原因であった。

明治27年は麦稈真田輸出の画期となった。即ち、これまで仕向地の一位を占めてきた北米合衆国に替わってイギリスが第一位となったことである（表3参照）。「英国、北米合衆国、仏蘭西、香港、瑞西、伊太利等順次之ニ亞グ」ことになった。その要因は、①品質の向上、②清国が「主ナル産地山東省等ノ供給高日清戦争ノ為メ減少シ」たこと、③佳良な原料、④婦人用帽子に適した「軟靱ノ質」がイギリス婦人の嗜好にあったこと、であった。この年6月には「日英通商航海条約」が改訂されて領事裁判権も撤廃され関税自主権の一部が回復した。日英関係の改善が後押しになっている。

この年初めて種類別の麦稈真田価額が判るので、以下に掲載しよう（単位は1反＝1束の価額）
〔神戸港の分〕合セ四菱 80銭 五小菱 50銭 七小菱 50銭 七寝小菱 50銭 丸四菱 45銭

五平（4～7mm） 75銭 五平（8～11） 40銭 同（12～16） 35銭 六菱 65銭
 [横浜港の分] 五コバ 30銭 七コバ 35銭 五平 28銭 四菱 28銭

主たる産地は「尾張, 備中, 備前, 備後等ニシテ」尾張は「概ネ横浜港」, 三備は「神戸港ヨリ輸出」された。同一種類でも三備の製品が優れていることが判明しよう。

【史料2】

明治27年

本品ノ二十七年ニ於ケル輸出ハ数量二百六万二千六百九十七束原価七十四万三千三百九十九円ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ数量ニ於テ八十万九千二百六十束即六割四分五厘原価ニ於テ三十六万五千五十円即九割六分四厘ノ増加ヲ呈セリ又本年毎百束ノ平均原価ハ三十六円六銭ニシテ前年ヨリ昇ルコト五円八十八銭ナリ而シテ今年本品ノ仕向ケ国ハ英吉利第一ニ居リ北米合衆国, 仏蘭西, 香港, 独逸, 伊太利等順次ニ之ニ亞ク即チ左表ノ如シ

前表ヲ按スレハ本年ハ各国共ニ本品ノ需要ヲ増シ実ニ空前ノ巨数ニ達セリ依テ其基因ヲ按スルニ左ニ掲ケル所即チ之レカ主ナルモノ、如シ

曩キニ輸出シタル麦稈真田中ニハ往々粗製ヲ交ヘ為メニ名声ヲ失墜セリ是ニ於テ兩三年来主トシテ之レカ製造ニ意ヲ加ヘ殊ニ職工ノ手芸逐年ノ経験ニ富ミ製作宜シキヲ得タルヲ以テ畜ニ名声ヲ挽回セシノミナラス賞用却テ旧ニ倍スルニ至チタルハ本年増出ノ第一因ナリ

元來本品ハ支那ヨリ欧米ニ供給セル所少額ナラサリシカ本年ハ其主ナル産地山東省等ノ供給高日清戦争ノ為メ減少シ随テ従來本品ヲ支那ヨリ仕入レタル外商モ本年ハ之レカ供給ヲ我ニ仰クニ至リシコト増出ノ第二因ナリ本年ハ麦作豊饒ニシテ殊ニ乾燥ニ方リ氣候順ニ適セシヲ以テ原料夥多

ンシテ佳良ナリシハ増出ノ第三因ナリ近時輸出ノ麦稈真田中ニハ婦人帽子ノ資料トスルモノ多キニ居ルヲ以テ其原料ノ如キモ専ラ該帽製作ニ便ナル軟韌ノ質ヲ選ミ組方モ又年々意匠ヲ革タメ主トシテ華主ノ意向ニ投合スルヲ務メタルハ増出ノ第四因ナリ

神戸税関長ノ所報ニヨレハ本年製造家ハ約定数ニ超過セル多額ヲ製出シ為メニ二三ノ種類ニ在テハ其滞貨数万束ニ昇レリ概スルニ神戸港ヨリ輸出ノモノハ横浜ニ比スレハ品質上等ニ位シ其次等品ハ横浜へ転送セシモノアリト云フ左ニ神戸横浜兩港ヨリ輸出スル麦稈真田中売行多キモノ、種類竝ニ本年ノ相場ヲ掲ケ以テ参考ニ供フ（以下省略）

明治28年の報告には、欧米における麦稈真田業の略史が記されている。①北米合衆国, ②伊太利, ③英吉利, ④仏蘭西, ⑤埃地利, 匈牙利の略歴である。例えば英吉利は「リュートン地方」が中心であるが、今では上級品の製造原料は自前で製造するが、1871年以降清国製真田が輸入されるとこの競争に敗れ、5万人いた製造業者が10年後には3万人に激減、麦稈真田を輸入して再輸出する者や帽子に加工して販売するようになった。再輸入先に北米合衆国が挙がられるが、それは以下の統計が示している。

一 麦稈真田大英国へ輸入高

重量 8,558,542封 金額 659,892磅

内広東より 重量 7,360,100封 金額 476,210磅

一 右ノ内仏蘭西, 独逸及合衆国へ再輸出高 重量 7,900,924封 金額 328,177磅

	二十七年	二十六年	増	減
英吉利	1,029,590 418,276	569,355 167,143	460,235 251,133	
北米合衆国	874,576 275,682	637,208 192,926	237,368 82,756	
仏蘭西	44,647 16,146	17,440 6,564	27,207 9,582	
香港	60,112 12,245	16,710 7,241	43,402 5,004	
独逸	21,552 8,074	2,394 628	19,158 7,446	
伊太利垂	12,404 5,889	20 5	12,384 5,884	
其他諸国	19,816 7,087	10,310 3,842	9,506 3,245	
計	2,062,697 743,399	1,253,437 378,349	809,260 365,050	

注) 上段：収量（反），下段：価額（円）

一 麦稈帽子輸出高（主トシテ豪州へ） 重量 653,104封 金額 371,262磅

アメリカでは麦藁を使用した真田の製造は行われず、1825年前後に輸入した麦稈真田を帽子に加工する帽子業が隆盛したのである。その需要に対し、イタリアやスイス、清国、日本などが輸出することになった。

(3) 岡山県における生産と流通

岡山県における明治20年代の麦稈真田業についての記述は、『岡山県農商課第十二回年報』が最初であり、麦稈真田紐岡山市3,300束、価額780円、笠岡村6,600束、885円、合計9,600束、1,665円であった。仕向地は岡山市が神戸・大坂、笠岡村は横浜・神戸・大坂となっている。そして注目される記事に、「麦作付反別及収穫高概算表」の説明文に「美作各郡ニ於テハ客冬暖期ニシテ気候適順其他麦価騰貴且ツ麦稈ノ需要多キカ為多数植付ヲナシタルニヨル」（6ページ）とある。後述することになるが、この年5月には上房郡松

表3 麦稈真田神戸港輸出仕向先の構成（%）

国名	M22	M23	M24	M25	M26	M27	M28	M29	M30	M31	M32	M33	M34	M35	M36	M37	M38	M39	M40	M41	M42	M43	M44	M45	
北米合衆国	71.9	89.3	93.4	69.3	51.0	37.1	17.6	12.6	19.3	21.2	26.8	33.0	27.7	27.5	23.1	19.8	16.5	17.8	14.9	31.2	32.0	38.2	30.5	35.4	
英吉利	23.9	5.8	3.4	26.8	44.2	56.3	61.9	60.1	52.3	57.4	54.4	48.6	50.7	33.7	36.2	37.7	40.3	31.8	32.0	26.3	26.2	13.5	19.9	23.6	
仏蘭西	1.1	1.2	1.9	3.3	1.7	2.2	9.1	9.6	5.0	4.0	1.4	1.5	2.6	11.0	10.5	10.6	9.5	11.5	18.1	14.2	11.1	22.2	19.4	15.1	
墺地利																			0.3	0.4	0.4	0.3	0.2	0.2	
香港					1.9	1.6	7.9	13.2	18.7	13.8	13.1	12.0	7.6	17.9	15.6	12.9	14.6	8.8	1.5	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	
独逸						1.1	3.7	1.9	1.5	0.6			3.4	2.9	9.9	12.3	11.6	20.0	29.3	20.3	20.8	18.5	21.5	17.7	
濠太刺利							0.8	1.3	1.7	2.2	3.2	2.7	5.1	3.6	2.2	3.3	4.1	3.2	1.7	2.7	2.9	2.4	2.8	1.0	
白耳義							0.7	0.3					0.8	0.9	0.5	0.7	0.9	1.1	0.6	0.9	1.0	1.0	1.5	2.4	
英領暹米利加																					0.8	0.5	0.2	0.1	
南米																									
加奈陀等													1.0	0.3											
支那(清国)								0.7	1.4	0.1						0.3	0.8	0.0	1.6	0.0	0.0				
伊太利					0.8								0.5	1.1	1.4	0.6	1.5	2.5	0.9	2.2	2.7	1.9	2.4	3.1	
比律賓																			0.7	1.1	1.4	1.3	1.3	1.3	
指図式																									
瑞西																									
中米																									
其他諸国	3.1	3.7	1.1	0.9	1.2	1.0	0.9	0.3	0.2	0.8	1.1	2.2	0.6	1.0	0.4	1.0	1.0	1.8	0.0	0.6	0.4	0.0	0.1	0.1	
国名	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	T13	T14	T15	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9	S10	S11	
北米合衆国	30.7	38.4	41.9	53.2	64.7	70.1	52.2	38.4	64.7	43.4	32.1	29.0	33.6	33.7	29.7	17.9		31.7	33.4	23.5	54.2	43.0	42.7	64.6	
英吉利	20.7	25.2	29.3	31.5	27.7	19.2	33.4	39.8	11.6	25.3	28.6	25.8	23.3	28.9	30.3	17.0		16.3	16.0	18.2	4.8	27.7	0.3	0.2	
仏蘭西	21.0	13.0	20.3	11.2	3.5	0.9	8.4	7.1	11.9	14.4	17.9	15.2	11.3	10.0	13.9	30.9		19.1	11.7	24.0	14.1	10.7	10.8	6.2	
墺地利	0.1	0.1	0	0																					
香港	0.3	0.3	0.1	0																					
独逸	13.5	14.3	0	0				1.3	4.5	4.3	3.5	3.1	3.8	2.2	1.6	4.4		3.0	5.6	4.5	0.7	1.6	0.3		
濠太刺利	1.0	2.1	3.4	0.7	1.0	4.7	1.3	1.2	1.1	0.5	0.2	0.0	0.1	0	0.0	0.4		0.1	1.4	3.0	0.5	0.1	0.2		
白耳義	4.7	2.2	0	0				1.2	0	0.5	1.7	0.7	0.7	0.4	1.1	2.9		0.8	0.3	3.5	0.1	0.2	0.2	0.6	
英領暹米利加	0.3	0.0	0	0.1	0.3	0.9	0.6	0.8	0	0.1	0.1														
南米						1.1	1.2	4.7	1.3	2.0	0.0	2.1	2.4	4.3	6.6	7.9		4.6	4.3	4.6	6.5	11.8	11.8	11.9	
加奈陀等													0	0.1	0.0	0	0.5		6.1	0.3	0.2	0.1	0.1		
支那(清国)															1.0	0.4	0.3		0.0	0.0	0.0	0.1		0.1	
伊太利	5.3	2.6	1.8	0.6	0.5	1.0	0.6	4.3	4.0	6.2	8.2	18.3	20.9	14.0	12.7	13.9		7.3	6.0	4.8	4.0	2.4	2.2	0.0	
比律賓	1.8	1.6	2.6	2.5	2.0	2.2	1.2	1.2	1.4	1.8	2.8	2.4	2.5	3.2	3.2	2.7		1.3	0.3	0.1	0.1	0.9	0.1		
指図式																			7.9	8.6	5.8	0			
瑞西																			10.8	2.2	0				
中米																						14.1	22.0	30.8	14.7
其他諸国	0.3	0.2	0.6	0.1	0.3	0.1	1.1	0.2	0.7	1.0	4.8	3.3	1.2	1.0	0.5	1.2		1.8	1.4	5.5	0.6	4.5	0.4	1.1	

注) M36年より麦稈真田と経木真田が、M44年より麻真田が区別して記載されるが、麦稈真田の価格のみで算出した。

注) T4から墺地利匈牙利、清国はS5年より中華民国へ。

表4 麦稈真田の生産—岡山県

郡名	明治23年		明治24年		明治25年		明治26年		明治28年				明治29年				明治30年			
	数量 東	価額 円	数量 東	価額 円	数量 東	価額 円	数量 東	価額 円	製造 戸数	職工 人員	数量 東	価額 円	製造 戸数	職工 人員	数量 東	価額 円	製造 戸数	職工 人員	数量 東	価額 円
岡山市			3,000	1,200	2,000	800	781	486	2	8	5,000	2,250	10	150	8,000	3,500	18	360	18,500	7,000
御野郡	不詳	22	71,580	22	72,511	145	245	145	1	3	2,400	720	1	10	10,000	2,700	3	6	10,201	3,040
津高郡	不詳	319	63,944	319	63,944	319	528	292					3	8	2,300	820	6	19	2,160	792
赤坂郡									4	58	955	310	8	76	2,335	977	7	140	3,630	1,229
上道郡			20,870	1,252									1	20	5,200	1,240	1	5	3,600	1,080
和気郡									3	30	500	250	2	33	2,250	940	1	1	150	60
邑久郡									3	48	6,000	2,400	6	60	6,429	2,799	18	192	25,002	10,844
児島郡	不詳	2,560	567	2,550	567	255			9	54	6,700	2,278	153	471	49,130	18,115	173	729	94,635	42,081
都宇郡													2	2	200	70	4	8	1,200	420
窪屋郡									3	20	1,500	600	1	5	700	210	16	81	6,061	3,350
浅口郡	6,625	3,752	216,515	40,358	166,675	19,329	68,592	41,140	2,547	7,138	1,400,313	545,825	8,332	16,645	1,470,860	556,951	8,650	15,794	1,383,248	412,757
小田郡	6,600	3,324	13,500	6,128	32,700	15,690	131,600	8,000	1,778	8,950	833,000	250,000	2,028	12,168	843,483	342,498	2,496	8,811	782,270	306,531
後月郡	200	140	200	140	210	147	220	153	103	754	32,580	15,359	229	2,141	329,360	164,365	263	1,161	180,585	64,046
下道郡			728	4,281	2,912	1,456	2,400	1,200	102	222	10,265	4,265	105	678	45,234	18,094	418	975	163,226	45,052
賀陽郡	2,762	997	3,335	1,450	255	510	988	588					16	153	12,060	4,673	36	600	46,983	18,183
上房郡	11,500	4,800	123,852	52,870	68,200	27,200	64,500	37,800	79	282	273,300	136,455	92	1,640	209,000	98,230	138	1,100	149,000	67,050
川上郡	4,000	400	3,335	991	220	244	495	241	54	150	45,400	20,430	111	1,288	171,000	73,530	190	980	128,000	57,600
阿賀郡									3	33	2,600	1,170	3	91	4,573	1,949	1	29	2,532	7,600
真島郡			10	5			20	18					1	38	1,500	225				
西北条郡					8,000	2,400	5,100	2,150	3	298	4,250	1,860	8	45	5,200	2,600	3	208	1,345	631
東北条郡	900	360																		
東南条郡			90	90	100	50														
勝北郡					2,500	750														
英田郡	300	150	300	150	300	150	300	150					2	47	300	150	1	5	920	465
条北条郡													1	3	50	20	8	51	2,530	739
条南条郡													1	2	280	71	2	7	770	231
総計		16,824	521,826	111,806	421,094	69,445	276,769	92,363	4,694	18,048	2,624,763	984,172	11,116	35,774	3,180,244	1,294,727	12,453	31,262	3,006,548	1,043,941
前年総計							421,094	69,445					4,694	18,048	2,624,763	984,172	11,116	35,774	3,180,244	1,294,727

注) 史料は『岡山県勸業年報』第十三回(明治23年分)第十四回,第十五回,第十六回,『岡山県農工商年報』第十八回,第十九回,第二十回による。
明治27年は記載がない。

28年度	4,694	18,048	2,624,763	984,172
27年度	3,498	14,266	1,126,132	458,341
26年度			276,769	92,363
25年度			421,094	69,445

山村(現高梁市)に「第二原田麦稈製造工場」が開設され,周辺村々ばかりではなく広く原料の麦稈を求めていた時期である。そして,明治24年には西北条郡津山町椿高下に「原田製造所」が開設され,128名の女子職工が従事していた⁶。

表4は,明治23年から30年に至る郡別の麦稈真田生産数量・価額を示している。最大は上房郡の28.5%,次いで浅口郡22.3%,小田郡19.8%などとなっているが,明治26年には浅口郡が上房郡を凌いで一位となっている。上房郡は,先述の原田伊之助経営の麦稈工場が主力であり,浅口郡は寄島村・鴨方村・六条院村などが該当し,小田郡の中心は笠岡村であった。この草創期には児島郡も15.2%を占めて産地の一つに数えられるがその後は伸び悩んである。東北条郡は900東,360円と数量・価額ともに微々たるもの

6 『明治褒賞録』(浪華書院編輯,明治30年)の「原田伊之助君」の項によれば,明治20年大阪難波の第一工場を廃止し,津山に第3工場を建設,「大阪府下岡町に第四工場建設 真田紐製造に従事」とある。この統計では明治26年から西北条郡が恒常的に掲載されているが,明治28年を見ると製造戸数3戸で職工数298人を数えている。原田製造所には120人程度の組子が雇用されていた模様である。なお,原田伊之助に関し,『香川県商工案内』(香川県物産陳列編,1921年)に,「本県ニ於ケル麦稈真田ノ起源ハ明治十五年大坂ノ人原田某ナルモノ小豆郡草壁村ニ来リ若干ノ麦稈ヲ購入セシニ創マレリ」と記されている。「原田某」は伊之助のことである。

であるが、県北地域は津山町を主たる産地にしており「麦作付反別及収穫高概算表」には「美作各郡ニ於テハ客冬暖気ニシテ気候適順其他麦価騰貴麦稈ノ需要多キカ為多数植付ヲナソタルニヨル」と麦の作付け、収穫の増加を説明している。この年はまだ麦稈真田の生産が盛んになったとは言い難いが、原田伊之助の麦稈買付等が行われていたことを示している。調査箇所が限定されたとはいえ、岡山市から600本、150円、笠岡村から3,700本、447円の麦稈真田紐、5,200貫、716円の麦稈を輸出している⁷。

さて、滋賀県農事試験場長の美代清彦の『復命書』（明治29年11月12日付報告）には、岡山県の藎草麦稈真田紐用栽培法調査報告が記されている。それには岡山県麦稈業調査として、一、沿革、一、製産額、生産地から、一 真田一反に要する原料の定量、職工賃銭等が記されている。製産地としては、笠岡・寄島と高粱が挙げられるが、前者は裸麦を原料とし、欧州向けの真田を製産し、後者は大麦を原料とし米国向けの真田が製産されるとする。製造法は「現に五百余あり皆意匠を練りて新物を発明するを以て月に年に其数を益す」とし、概略高粱地方は「平打ち」を主とし、四平・五平・七平が「最も盛ん」であり、笠岡・寄島では「角打ち菱打ち」で大七角・中七角・五角・中五角・丸四菱・中四菱、単四菱、七寝角などとなっている。それぞれの組み方により使用する原料の定量は異なり、裸麦の場合、単四菱の40匁から二節大七角の380匁まで、大麦五平打ち1ヤールの選稈本数は80本～183本までであった。

さて、原料となる大麦と裸麦の収支計算は表5の通りである。生産費の比較では大差がないが、収入面で穀実代価、麦稈代価いずれも裸麦が高値であるので、差引益金が大きく異なっていることがわかる。原料の善し悪しが製品の質を決めるとも言えるので、次第に裸麦、とりわけ「コピンカタギ」や「ヤハズ」などに特化されていく。高粱と笠岡・寄島の差異は、この他経営上の差もあった。即ち、高粱は六・七戸の資産家が麦稈を購入し、之を晒し、組紐の種類に応じて麦稈を組子に渡し、組子が製品に編んで組賃を得る、問屋制家内工業が展開された。もちろん、原田伊之助のように、工場（実態は作業上であるが）に組子を雇って製造することも行われていた。これに対し笠岡・寄島では、「製造家即ち組子又組子即ち製造家にして決て其間に区別なく」、各農家で麦を栽培し、これを摘み取り、晒し選別して原料も自前で製造、これを組む方法、即ち農家副業として展開し、「東京横浜神戸等より出張したる問屋なるものありて数千の仲買俗称「トンビ」なるもの、手を経て製品の買集をなす未だ同業組合の規約なく「トンビ」なるものは自由気儘に跋扈して弊害百出し粗製濫造は殆んど自然なりと異口同音に聞く処なり。」とし、トンビと称する仲買業者が中間マージン、暴利を挙げる事が指摘されている。品質の不揃いや長さの不統一などを目指す試みが繰り返され、同業組合の結成につながった。

さて、この時期の運送について記しておこう。山陽鉄道姫路－福山間が開通するのが明治24年9月であった⁸。

したがってこれ以前は海路で神戸まで運ばれた。明治24年の輸出入を見ると、寄島村が麦稈真田紐輸出90,000本、30,000円、輸入10,000本、3,000円、笠岡町が同組紐6,500本、1,528円、麦稈が4,200貫、774円となっている。寄島村の場

表5 麦稈用大麦裸麦収支計算書（明治29年）

単位：円

収支	種類／種別	大麦	裸麦
支出之部	小作料	2.10	2.10
	種代	0.40	0.21
	肥料代	5.20	7.05
	本田整地等	3.40	3.10
	麦稈摘賃	1.05	1.44
	穀実調整手間	1.10	1.10
	吠並縄代	0.42	0.42
	農具修繕費	0.40	0.40
	合計	14.07	15.82
収入之部	穀実代価	9.80	15.60
	麦稈代価	6.944	12.14
	合計	16.74	27.74
差引益金		2.674	12.92

注)『復命書』（滋賀県農事試験場長美代清彦）による。

7 調査箇所は、岡山市、御野郡芳田村大字米倉、和気郡片上村大字西片上、邑久郡牛窓村、上道郡西大寺村、同郡金岡村・九幡村大字九幡、児島郡下津井村大字下津井、同郡味野村・鴻島村・田ノ口村・日比村、窪屋郡倉敷村、浅口郡玉島村、同郡阿賀崎村・寄島村、小田郡笠岡村の17箇所である。

8 鉄道省編『日本鉄道史 上巻』842ページ。24年3月18日三石－岡山間、4月25日岡山－倉敷間、9月11日倉敷－福山間が開通した。

合仕向地、仕入地ともに記載がないが、笠岡町の場合、前者が横浜・大阪・神戸で、後者は大坂・讃岐・備前となっている。是等の輸送は船に拠ったものと思われる。

駅・港の区別がされる最初は明治28年である。この時の輸出入駅・港は、岡山駅・河岸場、牛窓港、鴨方駅、笠岡駅・港の4カ所であり、やや正確さに欠けるくらいがあるので表6に示した明治30年で検討することにする。この表によれば、輸出入に関わる駅・港は13カ所に上る。岡山市内では岡山市と河岸（京橋付近の河岸と思われる）、西大寺は輸入のみで、その量も多くない。下津井港では輸出・輸入ともにあるが、その量は多くない。倉敷駅も周辺の製造家から仲買商が入手し、神戸の間屋に輸送したものであろう。この年で最も多く輸出されたのは玉島港で2,085,000反834,000円であった。玉島駅1,200,000反240,000円を加えると実に3,285,000反1,074,000円の達する。玉島周辺はもとよりその大多数を占めるのは高粱・松山地区の製品である。伯備線が未開通であった時代で、高瀬舟による輸送が主体の時代であった。鴨方駅から多くの製品が神戸に輸送されたが、輸入品は四国からであった。寄島村は、鴨方村や笠岡町に運送されたものもあるが、多くは寄島港から神戸・横浜へ輸送され、輸入は、讃岐・備後・伊予・安芸となっている。笠岡は駅と港両方で多くの製品が神戸に輸送されている。輸入品の中には、麦稈真田紐ばかりではなく原料の麦稈も含まれていると推測される。麦稈真田の輸出が好調になるにつれて、原料の麦稈が不足し、四国や安芸・備後等から調達することも珍しくなかった。

さて、明治27年が麦稈真田業の画期としたが、このころから神戸に売込問屋が設立され、それに伴い産地形成が進み、問屋の支店網が形成され仲買商や取次人、製造者や組子などの分業体制が整備されていくことになった。犬丸鉄太郎『麦稈真田及経木真田』（東京博文館、1907年）には、明治40年までに、岡山県の間屋として信久組、野澤組、栄信組、三宅組、原田組、朝日商会、信栄組、大橋商会が掲載されている。信久組は明治30年頃津川信三郎が創立し、津川引退後矢切芳太郎が後継者となった⁹。

栄信組は寄島村出身の村上森造が明治28年神戸に設立した商店で、直輸出業で頭角を現し、明治41年には村上商会を設立、経営は実弟の村上常太郎に任せた¹⁰。

寄島村出身の大家泰庸が明治38年に朝日商会を設立、三宅組は明治27年に三宅民造が設立、養嗣子の右一（小田郡吉田尋常小学校長）が辞職後神戸に行き、民造死後真田及び雑貨の直輸出入事業を始めた。原田組は製造業者でもあった原田伊之助が神戸に設立した会社であった。

笠岡に支店を構えこれを拠点に麦稈真田の普及にも尽力した野澤組についてやや詳しくみよう。野澤組は、野澤宇之吉が設立した商社で東京に本店を構えていた。明治27年に嗣子の源治郎をヨーロッパに派遣し、麦稈真田及び帽子の製造について見聞を広めさせた。8月には笠岡町に出張員を派遣して麦稈の買入れを行い、明治28年源治郎が帰国、神戸市川崎町に荷造所を設置し、翌29年5月に「帝国製帽株式会社」を設立、笠岡町他9カ所に出張所を設けた。「当時笠岡の如き地は特質すべき産物はなく真に荒涼なる一

9 『浅口郡現代人物誌』（1925年）によれば、矢切芳太郎は津川信三郎、原田伊之助の指導を受け麦稈原料の仲買業を行い、当初は寄栄組に入社したが信久組に転換、以後合名会社、大正7年に株式会社で発展すると専務取締役となった。神戸商業会議所議員、神戸真田組合副組合長、真田連合会評議員を歴任した。なお、寄栄組は明治19年6月頃末勝吉が創立したが、明治31年に解散した。寄島村の麦稈真田業を始めた先駆者の一人であった蔦川喜平は日清戦争に従軍後、寄島町で肥料商をしていたが、寄栄組に入社し明治39年神戸で麦稈真田の直輸出業に従事した。しかし、寄栄組が解散することになったので、栄信組に入社し、香川県坂出町で麦稈真田の発展に尽力し、香川県麦稈真田同業組合評議員、日本麦稈真田連合会議員、坂出町会議員となった。

10 『日英博覧会授賞人名録』（農商務日英博覧会事務局、明治43年）によれば、麦稈・経木真田部門で、野澤源治郎（東京）、岡山県麦稈同業組合（岡山）信久組（兵庫）、村上森造（兵庫）や11名が授賞している。また、『神戸市要鑑』（神戸市要鑑編纂事務所、明治42年）によれば、市内の資産家のうち10万円以上の資産家に、岡山県関係で野澤源治郎・村上森造が入っており、直輸出商には達磨商会（高羽富士夫）、村上商会（村上森造）、野澤組神戸支店（野澤雄治）が、麦稈真田商には池田商店（店主池田保造）、原田商会（店主原田伊之助）、栄信組（組長村上常太郎）、三宅組（組長三宅右一）、合名会社信久組（組長田中郁太郎）が掲載されている。なお、村上森造に関しては、田中宗徳・西嶋勇編『頌徳積善の人村上森造翁』（平成25年、寄島図書館所蔵）がある。

小寒村に過ぎざりしが翁（宇之吉－引用者注）が此に支店を設置して斯業を指導奨励したる為め大に此町を賑はすを得たり。（中略）奨励拡張の後は粗製濫造を戒しめ常に其製法を流行の魁たらしめんと英米両国の当局者を招聘して品評指導を受けたり。明治三十八年同町に設置したる伝習所にては無償を以て意匠の研究手工の練習を為さしめ修業年限を一ヶ年半、半年、三ヶ月の三種とし汎く各地より募集せしに。年々二百名内外の応募ありて五ヶ年間之を継続せし経費は壹万二千余円に上れり。¹¹

この他、香川県算出の裸麦「コビンカタギ」の種子を東京・千葉・大阪・兵庫・島根に無料寄贈などの活動を行ったり、表7に示したように品評会や競技会を開催し、麦稈真田業の普及に努めた。『野澤宇齋翁伝』には「笠岡支店に於て英人ホスター氏麦稈注文の処」及び「岡山県笠岡支店に於ける真田競技会」の写真が掲載されている。私立兵庫県勸業会が明治29年に実施した笠岡町金浦の調査報告によると¹²、価格の項では「製造者ノ売価、仲間及外商へ売込価格、製造家ニ於テハ惣テ壱割位ノ純益」がある。荷造り方法は汽車の場合を含め汽船、海外直輸出の場合も「長三尺巾一尺七寸深二尺五寸ノ箱」を使用し、販売方法は神戸商人との契約によって「委託販売」する方法、仲買人が神戸商人から注文を受け製造者から購入する方法などが報告されている。また、取引の弊害として、製造人が1反14丈の規定に反し短く製造すること、品質の異なる製品を箱詰めにする、仲買人は注文品をキャンセルしたり値段を下げたりすることなどが報告されている。売込商には、小田郡笠岡町森谷利七郎、浅口郡寄島村寄家組、神戸市信久組の3社が挙げられ、アメリカ向け輸出では「瑞西国ヨリ笠岡町共進会参考品トシテ出品セルモノト比較セハ品質ノ佳良ナル技術ノ精妙ナルハ本邦品ノ最モ優等ニ位スル等」将来性が高いことが報告されている。

2. 岡山県麦稈同業組合の設立

(1) 同業組合設立と麦稈真田業者の定義

粗製濫造を防ぎ、品質の統一や不正防止を実行するには、同業者の結束と品質向上の努力が欠かせない。『岡山県真田同業組合沿革史』¹³によれば、このような視点から同業組合の結成を試みたのは、上房郡麦稈真田組合と浅口郡麦稈真田組合であった。とりわけ、上房郡では副組合長の原田伊之助、組合長の板倉信古、上房郡長の松井良哉、郡書記谷八蔵が県庁を訪れ、上房郡・浅口両郡の「勸説」として同業組合設立の必要性を申し出た。明治29年9月のことであった。翌30年1月には岡山市で有志の大会を開き、4月の法律第47号「重要輸出品同業組合法」、9月の「同法施行規則」を期に、設立運動を加速し12月には原田伊之助ほか25人の発起者が各自賛同者を集め、31年3月に17,124人を会員とする発起人会がもたれ、次いで4月21日に岡山市後楽園の鶴鳴館で創立総会が開かれた。

この創立総会には、1市17郡7町65村220名と住所不明者14人の計234名が参加した。郡別で見ると多い順に、浅口郡25町村82人、小田郡16町村72人、川上郡5町村14人、後月郡6町村13人、上房郡2町村13人と備中地域が多くを占めており、以下下道郡6村8人、邑久郡3村3人、岡山市3人、津高郡2村2人、

11 『野澤宇齋翁伝』大正13年、22ページ。

12 明治29年『麦稈真田業調査報告（私立兵庫県勸業会）』による。

13 組合の名称をめぐる、『沿革史』では、「組合設立ノ当時ハ地区内ノ製品ハ専ラ麦稈真田紐ニ限ラレタルヲ以テ組合ヲ岡山県麦稈真田同業組合ト称セシガ後経木其他草木ノ茎幹皮葉ヲ混和若シクハ単独ニ編組セルモノヲ出シ後亦麻真田ヲ出セシニヨリ之ヲ組合ニ編入セルノ時即大正四年四月岡山県真田同業組合ト改称セリ」（18ページ）と成っているが、『岡山県の真田』（岡山県真田同業組合、1917年）の「附録」によれば「八月二十六日農商務大臣の認可を受け茲に岡山県麦稈同業組合は創立せられたり」とし、大正4年3月8日の組合会議の同意により「四月九日主務省の認可に依り岡山県真田同業組合と改称し今日に及べり」となっている。当初の組合名は果たしてどれが正しいのか。写2は、この問題を解決する有力な証拠であろう。児島郡八浜村八浜在住の製造業者松谷慶次郎が取得した「岡山県麦稈同業組合員之證」（井上弘氏提供）である。明治31年から大正4年までは「岡山県麦稈同業組合」と称していたのである。



写1 見本帳表紙

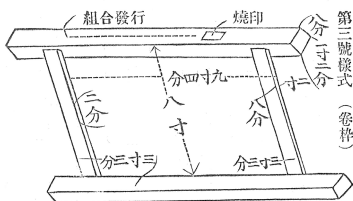


図1 公式の巻枠 (型枠)

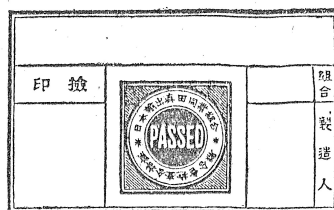


図2 日本輸出真田同業組合の印章

表6 明治30年麦稈真田の輸出入

駅・港名	輸出货量	価額	反当価格	輸入量	価額	反当価格
合計	4,899,906	1,414,343		157,690	51,393	
岡山駅	3,700	1,406	380			
岡山河岸	14,800	5,624	380			
西大寺				17,000	5,000	340
牛窓港	4,520	1,808	400			
下津井港	18,000	7,200	400	2,500	1,500	600
倉敷駅	57,600	14,400	200			
玉島駅	1,200,000	240,000	200	480,000	96,000	200
玉島港	2,085,000	834,000	400	89,230	35,692	400
西ノ浦港	86,850	47,767	550	12,150	6,682	550
鴨方駅	748,898	224,669	300	109,842	32,953	300
寄島港	544,000	206,720	380	184,000	66,240	360
笠岡駅	1,820,000	1,092,000	600			
笠岡港	120,000	720,000	600			

注) 1. 『岡山県第二十回農商工年報』による。
 2. 単位：輸出入量は反，価額は円，単当価額は厘。

表7 真田品評会競技会開催表

会名	場所	期間	摘要
第一回 麦稈真田品評会	岡山県笠岡町	M28.3	品質審査
第二回	〃	M29.3	変打奨励
第三回 麦稈真田共進会	〃	M31.1	変打奨励
第四回 麦稈真田品評会	〃	M32.5	変打奨励
第五回	〃	M33.5	変打奨励
第六回 麦稈真田競技会	〃	M34.5	組方競争
第七回 麦稈真田共進会	香川県高松市	〃.7	意匠変打奨励
第八回	愛知県熱田市	〃.8	意匠変打奨励
第九回 品評会	兵庫県神戸市	M35.5	意匠変打奨励
第十回 第2回競技会	岡山県笠岡町	M35.5	組方競争
第十一回 共進会及競技会	〃	M36.5	変打奨励会及組方競争会

注) 『野澤宇斎翁伝』24ページ。

東北条郡・西北条郡・真島郡・賀陽郡・久米南条郡各1村1人である。笠岡町34人，玉島町・寄島村各12，高梁町11名が特に多く参加していることが判るが，注目すべきはその広がりであろう。しかし意見が分裂しまとまらず発起人会から数えて58日間に31回の会議を重ね，やっと5月3日総会が終わり6月21日許可申請，8月26日に農商務大臣より許可された。

その「定款」によれば、組合員は「麦稈経木麻其他草葉茎皮ヲ原料トセル真田紐並ニ其原料ノ製造業、販売業、取次業、仲立業、染色業ヲ営ムモノヲ以テ組織ス 製造業ハ製造場ヲ設備スルト否トニ拘ラス又職工労務者ヲ使用スルト否トニ拘ラス真田紐又ハ原料ノ製造ヲ業トスルモノヲ云フ 但シ他ヨリ原料ノ供給ヲ受ケ労務ニ服シ其賃銭ノミヲ得ルモノハ此限りニアラス

販売業ハ真田紐又ハ其原料ノ売買ヲ業トスル問屋及仲買業者ヲ云フ 但シ一定ノ店舗ヲ設クルモノヲ問屋業トシ否ラサルモノヲ仲介業トス

取次業ハ真田紐又ハ其原料ヲ供給者ヨリ需要者ニ給付シ口銭又ハ手数料ヲ得ルヲ以テ目的トナスモノヲ云フ

仲立業ハ真田紐又ハ其原料ノ製造売買取次染色ノ媒介ヲナシ口銭又ハ手数料ヲ得ルヲ以テ目的トナスモノヲ云フ

染色業ハ一定ノ場所ヲ設備シ真田紐又ハ其原料ニ着色ヲ施スモノヲ云フ」(第一条)となっている。染色も明治36年より「色真田大ニ流行シ染色法大ニ進ミ幾多新規ノ方法ニ依リ各様ノ珍品奇種ヲ出セリ」(『沿革史』72ページ)とある通り創立からしばらく立ってから流行し始め、染色業者が成立できたのである。本定款は大正5年9月20日変更認可となったものであり、当初は経木・麻真田は無かった。

したがって組合員も真田紐の隆盛に合わせて変化したのはいうまでもない。「創立当時ハ麦稈真田紐ノ製造人、組紐取次人、販売業、原料販売業、染色業、仲立業六種ノ業者」、明治32年6月には「麦稈真田紐ノ製造人、賃組人、組紐取次人、販売業、染色業及仲立業」と改め、翌年11月に「麦稈真田紐ノ製造人、組紐取次人、販売業、原料販売業、染色業及仲立業」とし、経木真田生産が始まった明治36年7月には「麦稈真田紐及ヒ木製真田紐ノ製造人、組紐取次人、販売業、原料販売業、染色業及仲立業」など製造品の変化に応じて改正された¹⁴。

組合人数は、創立当初の17,124人から10年後の明治41年には32,053人、その後も33,000人台を記録し、大正7年には36,510人を数えている。その大正7年の組合員を業種別に見ると、販売業665名(問屋業80名、仲介業者592名)、取次業125名、仲立業5名、染色業1名、製造業者35,720名(内7名が県外輸出を為すもの)であった(以上、98-99ページ)。斯業が家内工業であり農家副業であることを物語っている。

さて、組合設立の目的は、粗製濫造を防ぎ、国際的に信用される製品の製造を目指すことであった。そのためには、製品の統一が欠かせない。紐の長さは麦稈・経木は1尺6寸、掛棒(巻棒)に6列9重(又

14 『内外麦稈真田工業全書』(内外麦稈真田工業全書発行所、明治35年)に「神戸麦稈真田同業組合定款」が掲載されている。それによれば、組合員の営業種類は、製造業者(染業者を兼ねる)、販売業者(売込業者、委託販売業者)、直輸出業者、仲介業者の4種類である。西日本の麦稈真田・経木真田の輸出港神戸に設立された組合であるだけに、売込業者(問屋)や直輸出業者の加盟が特徴的である。この組合は、明治32年8月22日に農商務大臣の認可を得て設立されたが、組長は信久組津川信三郎(神戸の商人-『高梁市史』明治27年湯浅清平が神戸商人津川新三郎と契約、販路拡大、津川を金主として仲立業を始める)、副組長兼評議員森谷組森谷利太郎、評議員奥田熊二郎、栄信組村上森造、三宅組三宅民蔵、寄栄組三宅幸平、清水商店主清水安太郎が就任していたが、同年10月15日の役員改選で組長は合資会社信久組津川信三郎、副組長兼森谷組森谷利太郎、評議員奥田熊二郎、栄信組村上森造、三宅組三宅民蔵・村尾哲郎・久保嘉太郎、寄栄組三宅幸平、評議員補欠に野澤組野澤源次郎・葛西治兵衛・渡辺藤三郎を、11月8日会計村上森造、三宅幸平を選任した。第3回改訂では組長代務副組長に信久組の矢切芳太郎、評議員に野澤組支店野澤雄治、理事に谷川隣が新たに選任された。(同書290-292ページ)組合長始め主だった役員の殆どは岡山県出身者で神戸在住のものであった。

因みに本書の執筆者の河本房次郎(岡山市)、蔦川喜平(寄島町)、今井兼吉(寄島町)、原田徹仁(寄島町)は岡山県出身者であり、校閲者には関西麦稈業率先効労者岡山県麦稈真田同業組合組長直輪貿易商原田伊之助、岡山県麦稈真田問屋先進効労者貿易商栄信組神戸本店主村上森造、岡山県製造問屋先進者合名会社信久組員神戸麦稈真田同業組合副組長矢切芳太郎、岡山県麦稈業製造卒先奨効労者現香川県技手笠原沖太が名を連ねている。

なお、本書のもとになった『綾蒔麦稈真田工業全書第一編』(綾蒔麦稈真田工業全書発行社、明治29年)の表紙には正四位勲四等貴族院議員五二会監督前田正名公題字、岡山県花蒔業組合副頭取綾蒔合資会社塩津要平君校閲、麦稈真田直輪貿易商野澤源次郎君校閲、関西麦稈業率先者原田伊之助君校閲、岡山県元寄栄組員蔦川喜平、岡山県元寄栄組員今井兼吉、岡山県實業者原田 穰 合著となっている。

は6列12重), 麻真田は9寸5歩5厘, 7列17重(又は7列25重), 荒芋又は三角藪で2ヵ所結束することなど定款で決められていた。図1は関西真田同業組合連合会¹⁵の「真田検査規則」に示された掛枠(巻枠)である。これは各地組合から配布することになっていた。検査は一, 尺度, 二, 仕立方, 三, 編方, 四, 幅員, 五, 原料, の5項目で, 尺度は先述の長さに満たないもの, 内径が1尺5寸6分, 麻真田は9寸4分に満たないもの, 幅員の均一でないもの, 1反の長さで切断した箇所があるもの, 1反中種類や品位が異なるもの, 色度の一定しないもの, 腐ったもの, 乾燥不足, 漂白過度なもの, 汚染箇所のあるものなど(第七条ノ四)である。検査が終了し合格した製品には図2のような印章が添付された。

(2) 明治30年代の生産と流通

岡山県麦稈同業組合が結成され, 粗製濫造を防ぎ, 併せて斯業の普及・発展を期したが, 表8に明治32年から大正12年に至る25年間の麦稈, 経木, 麦稈経木混成, 麻浅田の生産府県を示している。煩雑さをさけるため数値を省略しているが, これをもとに真田業について類型を試みると, ①麦稈真田が一貫して製造される府県: 埼玉, 愛知, 岡山, 広島, 山口, 香川, 愛媛, 福岡の諸県, ②麦稈→経木→麻へ転換する府県: 東京, 三重, 兵庫, 鳥取, 茨城, ③麦稈経木混成→経木→経木麻混成へ転換: 長野, 神奈川, ④麦稈から経木に転換: 鳥取, 高知, 大分, ⑤大正9年(戦後恐慌)で終了した府県: 奈良, 岐阜, 徳島, 大分, 宮崎, ⑥麻真田地帯: 福井, 石川, 富山, 岐阜, 栃木(経木→大正4年から麻へ)となろう。

本稿が対象とするのは麻真田を除く麦稈真田, 経木真田および麦稈経木混成真田であり, 以下の記述も麻真田を除外して行うこととする。もちろん, 上に述べた類型もその生産数量および価額を勘案すると, 例えば①の麦稈真田生産地帯と言っても表9に示した如く, トップの岡山県が価額1,772,807円で64.1%を占め, 2位愛知県582,936円21.2%, 3位香川県119,031円4.3%と上位3県で90%を占めており, 31府県で生産されていると言っても微々たるものである。

表10は明治33年から37年の岡山県内の生産数量および価額を示している。トップは浅口郡で250万反87万5000円(48.7%), 次いで小田郡の145万反50万7500円(28.2%), 上房郡20万反9万円(5.0%)などとなり, 上位3郡で約90%を占めている。この傾向が続くが, 明治36年からは麦稈真田に経木真田が加わり, さらに麦稈と経木を混合して真田とする麦稈経木混成真田が生産された。経木真田は浅口郡, 小田郡, 上房郡3郡のみの生産であるが, 混成真田はこの3郡に加えて邑久郡, 児島郡, 都窪郡, 後月郡, 吉備郡, 川上郡で生産された。この明治36年の生産数量と価額は, 麦稈真田4,378,958反(68.9%) 11,744,484円(69.1%), 麦稈経木混成真田1,912,224反(29.9%) 751,499円(29.8%), 経木真田94,325反(1.5%) 27,675

15 神戸港から輸出する西日本の組合が結成した連合会である。「定款」第一条に加盟同業組合が掲載されている。即ち岡山県真田同業組合, 香川県麦稈真田同業組合, 愛知県真田同業組合, 神戸麦稈真田同業組合, 広島県真田同業組合, 山口県真田同業組合, 神戸麻真田同業組合の7団体である。また, 大正6年10月24日設立認可の「日本輸出真田同業組合連合会」が設立された。これに加盟の組合は次の通りである。()内は総会代表員数を示す。東京府荏原郡真田同業組合(1), 東京府麻真田同業組合(1), 横浜真田商同業組合(2), 神戸真田同業組合(2), 埼玉真田同業組合(1), 愛知県真田同業組合(1), 静岡県麻真田麻玉同業組合(1), 石川県輸出麻真田同業組合(1), 岡山県真田同業組合(3), 広島県備後真田同業組合(1), 山口県真田同業組合(1), 香川県麦稈真田同業組合(2), 茨城県輸出真田同業組合(1), 広島県安芸国真田同業組合(1), 新潟県麻真田同業組合(1), 福井県輸出麻真田同業組合(1), 富山県東部麻真田同業組合(1), 岐阜県真田同業組合(1)の18同業組合。岡山県真田同業組合の3人, 香川県麦稈真田同業組合の2人が注目される。当然合格品には連合会の印章が使用された。また, 岡山県農会編『岡山県の特産作物とその加工』(大正15年)によれば, 真田問屋業者32人, 原料問屋業者25人, 真田仲買業280人, 原料仲買業101名となっており, その主なものを以下の通り列挙している。

真田問屋業: 浅口郡六条院村 日本真田株式会社, 同 株式会社頃末商会鴨方支店, 同 株式会社村上商店鴨方支店, 同 富田村 石井角次郎 真田仲買業: 同 六条院村 佐藤重五郎, 同 金光町 平田幸平 同 黒崎村 甲谷コト, 同 鴨方町 西本信太, 同 里庄村 小野山一郎, 小田郡陶山村 瀬戸太一, 同 金浦町 仁科次郎, 浅口郡連島町 板野大一郎, 同 玉島町 大田重太郎, 原料問屋業: 同 寄島町 川崎浅次郎, 小田郡神島内村 北田伝三, 同 金浦町 大橋新三, 原料仲買業: 浅口郡金光町 松本八百造, 小田郡笠岡町 小野清吉, 同 城見村 塩出七平。

円 (1.1%), 合計6,385,507反2,523,658円である。麦稈真田が約7割, 麦稈経木混成真田が3割で, 経木真田は極めて小さいと言える。

さて, 30年代の輸出状況について, 先の『貿易概覧』によって見ることにしよう (前掲表3参照)。明治27年以来仕向地の最多はイギリスであったことは先に見た通りであるが, 30年代もこの傾向に変わりはなかった。即ち, 明治32年仕向地におけるイギリスの割合は54.4%で, 2位の北米合衆国26.8%を大きく引き離している。ただし, 翌33年には「清国事件」, いわゆる北清事変が起き, 「本年ハ前年ト異ナリ五平物ノ米国ヘ向ケ輸出セルモノ多カリシカ個ハ畢竟同品カ従来清国ヨリ米国ヘ仕向ケラレタル七平物ト品質ニ於テ類似セルニ此ノ七平物ハ清国事件ノ影響ニテ同国ヨリ米国ヘノ輸出杜絶シタルニ依リ自然代用品トシテ需要セラル、ニ至リシモノナルヘシト云フ (中略) 本年注文ノ多カリシハ概シテ中等以下ノ品ニテ即

表8 麦稈・経木・麻真田の生産府県

番号	府県名	第16次	第17次	第18次	第19次	第20次	第21次	第22次	第23次	第24次	第25次	第26次	第27次	第28次	第29次	第30次	第31次	第32次	第33次	第34次	第35次	第36次	第37次	第38次	第39次	第40次
	年次	M32	M33	M34	M35	M36	M37	M38	M39	M40	M41	M42	M43	M44	M45	T2	T3	T4	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	
1	東京	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
2	京都							□	□	□	□		□	□	□	□	□		□	□						△
3	大阪	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△						△
4	神奈川	□						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	□	□	△
5	兵庫	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△
6	長崎	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△					
7	新潟						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△			△
8	埼玉	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
9	群馬						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△						△
10	千葉	□	□	□			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
11	茨城				□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
12	栃木							□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△				△
13	奈良	□	□	□			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
14	三重	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
15	愛知	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
16	静岡					□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
17	山梨						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□								
18	滋賀	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△							
19	岐阜	□	□	□	□			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
20	長野						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
21	宮城	□					□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△							
22	福島					□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△						△
23	岩手						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△
25	山形																		△	△						
26	秋田						□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△						
27	福井							□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
28	石川							□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
29	富山			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
30	鳥取	□		□			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
31	島根	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
32	岡山	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
33	広島	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
34	山口	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
35	和歌山	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△						
36	徳島	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
37	香川	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
38	愛媛	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
39	高知	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
40	福岡	□	□	□			□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
41	大分	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	△	△	△	△	△	△	△	△
42	佐賀	□	□	□	□	□																				
43	熊本	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□								
44	宮崎	□																								
45	鹿児島																									
47	北海道																									

注) 各年次『農商務統計表』より作成。□麦稈, ○経木, ■麦稈経木混成△麻真田を示す。

チ五等若シクハ六等位ノ品ナリ故ニ本年ハ尾州産ノ売行多カリシヨリ自然其価格ヲ引上ケ三備物ト著シキ差等ナキニ至リタリト云フ」と競合する清国産の米国向け製品、特に「七平物」のような低級な品が輸出途絶により、尾張産麦稈真田の輸出が増えた。

この後の変化で注目されるのは、香港への輸出増加とフランス向け輸出の増加である。香港向けは低品質の物が多いが、フランス向けは高級品が好まれ、イタリアやスイスと並び三備産の麦稈真田が輸出されたのである。租製濫造を防ぎ、品質の統一を図る同業組合の役割が一層重要となったのである。

さて、明治33年からは「経木真田」の輸出が始まった。『貿易概覧』に掲載された経木真田についての最初の史料は以下の通りである。

【史料3】

○経木真田

本年本品ノ輸出ハ数量百三十三万九百八十三束価額四十六万四千三百九十円ニシテ之ヲ前年ニ比スレハ左ノ如シ

国 名	数 量			価 格		
	三十五年	三十四年	三十三年	三十五年	三十四年	三十三年
北米合衆国	1,004,639	503,364	343,276	318,958	224,602	133,713
英 吉 利	236,379	23,745	2,500	108,113	10,047	425
香 港	23,158	1,115	7,163	11,602	361	2,958
加奈陀等※	27,320	19,811	—	9,693	7,765	—
其他諸国	39,487	4,282	2,421	16,024	1,463	1,019
計	1,330,983	552,317	355,360	464,390	244,238	138,115

※加奈陀及英領亜米利加

港別表

港 名	数 量 束			価 額 円		
	三十五年	三十四年	三十三年	三十五年	三十四年	三十三年
横 浜	1,258,806	524,073	351,733	428,987	230,458	136,892
神 戸	72,177	28,244	3,627	35,403	13,780	1,223
計	1,330,983	552,317	355,360	464,390	244,238	138,115

本品ハ北海道奥羽等ニ産スル白楊樹ヲ以テ其主タル原料トナセトモ亦往々蝦夷松トド松、檜、棕、神代杉等ニシテ製造スルモノアリ孰レモ婦人帽子製造用ノ原料ニ供スルモノトス左レハ其需要ノ如キ仕向地ノ流行ニ從テ変動アルヘキモ兎ニ角尚ホ増進ノ途中ニ在ルハ疑フヘカラサルノ充実ナルカ如ク本品輸出ノ前途ハ深く望ヲ囑スルニ足ルヘシト云フ

本品ノ輸出ハ横浜港ヲ主トシ其製造ノ如キモ横浜付近ヲ最モ盛大ナリトス故ニ目下神戸港ヨリ輸出スルモノ重ニ此ノ東国製ヲ取寄セタルモノナリト云フ

これによれば、経木真田はその殆どがアメリカ向けであったが、35年からイギリスへの輸出が増加し、アメリカが75%強、イギリスが20%弱となっている。白陽樹（ネコ柳）などを匏によって薄く削り麦稈真田と同じように手編みするもので¹⁶、急速に普及・輸出されたが、流行の変化に翻弄され、大正9（1920）年のいわゆる「戦後恐慌」を契機として一気に衰退の過程に入った。

(3) 『職工事情』にみる麦稈真田の生産

明治30年代、日本資本主義成立期の社会に関して、横山源之助『日本之下層社会』が刊行されたのが明

16 田中信清『経木』（法政大学出版局、1980年初版1刷、2001年第4刷）には、経木細工の項に「経木真田」について、その起源、真田用経木の種類、輸出の状況などが詳述されている。「多府県にわたって作られていた経木真田も、大正一〇年マニラ麻の進出により一大打撃をうけたのである。そのため輸出は途絶し、業者は余儀なく他産業に転換のやむなきに至った。」（170ページ）

9表 麦稈真田の生産・普及（全国）明治32年

府県	製造戸数	職工			数量 反	価額 円	%	順位	備考
		男	女	合計					
東京	50	90	128	218	300,000	69,000	2.5	5	荏原郡ヨリ産出ス
大阪	5	5	11	16	3,920	1,681	0.1	17	—
神奈川	19	100	600	700	250,000	75,000	2.7	4	橘樹郡内ノ産出ニシテ販路益々盛ナルモ原料ニ缺乏ヲ告クルノ傾キアリ
兵庫	2	—	60	60	6,000	3,000	0.1	12	—
長崎	7	17	150	167	8,610	2,190	0.01	14	産地ハ南高来郡ニシテ業務漸次発達ノ状況ナリ
埼玉	120	—	200	200	37,833	5,675	0.2	11	—
千葉	203	58	114	172	11,300	2,840	0.1	13	夷隅、長正、東葛飾ノ三郡ニシテ他ニ製造スルモノナシ
奈良	3	1	4	5	206	205	0.01	26	主産地ハ生駒、南葛城、吉野ノ三郡トス
三重	2	2	22	24	5,400	1,714	0.1	16	—
愛知	1,909	364	9,720	10,084	1,953,497	582,936	21.2	2	愛知郡ニ於テ生産セリ目下隆盛ニシテ原料不足ヲ告クル傾アリ
滋賀	3	—	15	15	4,681	1,256	0.05	18	愛知郡ニ産ス（ママ）
岐阜	2	6	3	9	390	352	0.01	24	郡上郡、山県郡ノ二郡ヨリ産出ス
宮城	1	3	4	7	—	324	0.01	25	—
鳥取	1	3	70	73	2,442	1,015	0.04	20	—
島根	10	14	9	23	3,075	615	0.02	21	主産地ハ松江市ニシテ其他ニ於テモ伝習所等ヲ設ケ斯業ヲ奨励セリ
岡山	18,461	—	—	52,767	5,463,455	1,772,807	64.1	1	県下重要ノ産物ニシテ備中国小田、浅口ノ二郡ハ主産地ニシテ盛況ヲ呈セリ
広島	380	439	1,537	1,976	171,952	56,778	2.1	6	—
山口	77	22	917	939	49,633	17,387	0.6	8	前年ニ比シ製造戸数十三戸ヲ減スレトモ職工ハ大ニ増加セリ然レトモ其産額ハ前年ト大差ナシ熊毛郡吉敷郡ヲ以テ主産地トス
和歌山	4	11	392	403	42,000	17,750	0.6	7	海草郡ヨリ産出スル最モ多ク産額十分ノ五ヲ占ム
徳島	15	56	65	121	12,624	1,254	0.05	19	—
香川	595	847	1,798	2,645	309,521	119,031	4.3	3	—
愛媛	11	18	43	61	9,882	8,645	0.3	9	主産地ハ越智郡五分六厘、宇摩郡四分四厘ノ割合ヲ以テ産出ス
高知	21	168	147	315	1,970	409	0.01	23	前年ニ比スルモ産額大差ナシ
福岡	1	—	2	2	10	10	0.00	28	—
大分	8	21	115	136	5,373	1,996	0.1	15	産出地ハ速見、下毛ノ二郡トス
佐賀	1	2	3	5	2,000	420	0.01	22	—
熊本	4	38	75	113	21,700	7,810	0.3	10	—
宮崎	1	2	3	5	50	18	0.00	27	本年ヨリ北諸県郡ニテ製ス
計	21,916	2,287	16,207	71,261	8,677,563	2,752,118	100.0		

備考 職工ノ合計ハ内訳ト符号セス之レ岡山県ノ職工ハ男女区別シ難キニ因ル

治32年のことであつた。同書の農家の内職の項には富山県高岡市の例が記されている。地綿木綿の産地であつたが、紡績木綿に押されて「我が多数農家の家計を少なからず助けたる内職の減少なり。」¹⁷とし、農家の内職としては北海道へ輸出する蓆を織るようになったと記しているが、麦稈真田に関しては記述がない。しかし、同時期に農商務省商工局によって調査・編纂された『職工事情』には「製綿、組物、電球、燐寸軸木、刷子、花苧、麦稈真田等職工事情」として、以下のような記述がある¹⁸。「麦稈真田、花苧業ノ本場タル岡山県下ニ於テハ先年会社組織ヲ以テ工場ヲ創設シ作業セルモノアリシト雖其後失敗ニ帰シ今日ニ於テハ工場ヲ閉鎖シ之ニ関係セシ者ハ所謂問屋トナリ麦稈真田ニ在テハ原料ヲ供給シ花苧ニ在ツテハ出シ機ト称シ原料ヲ供給スルハ勿論機台ヲモ供給シテ老幼婦女ノ内職トシテ自家ニ於テ之ヲ為サシムルコト、ナレリ（中略）又農家ニ於テハ各自其原料ヲ栽培シ之ヲ以テ農業ノ余暇ニ副業トシテ製造シ幼童ノ如キモ半ハ遊戯的ニ仕事ヲ為スモノ多シ而シテ問屋若クハ鳶（仲買人）ト称スル者は是等ノ製品ヲ買集ムルナ

17 横山源之助『日本の下層社会』（岩波文庫、1985年改訂版2000年第48刷）304ページ。

18 土屋喬雄校閲、農商務商工局『職工事情』第二巻（新紀元社版、昭和51年）260-261ページ。

表10 岡山県麦稈真田の生産

単位：反、円

年次	M33		M34		M35		M36		M37	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
岡山市	1,500	525	3,104	109	3,105	869	2,742	1,068	4,114	9,832
御津郡	1,650	578	800	28	800	224	1,918	747	2,302	653
赤磐郡	1,500	525	800	30	800	224	850	331	1,020	107
和気郡	600	210	570	14	370	104	2,235	870	2,906	847
邑久郡	100,000	35,000	78,000	3,276	78,000	23,400	115,850	45,100	128,584	33,303
上道郡	1,000	350	650	26	650	182	1,350	426	1,620	662
児島郡	235,000	82,250	112,000	41,440	112,000	31,360	282,000	109,783	315,842	74,854
都窪郡	100,000	35,000	13,000	4,530	13,000	3,640	39,000	25,183	46,800	11,255
浅口郡	2,500,000	875,000	2,280,000	820,800	2,285,100	696,951	3,228,202	1,258,998	3,712,431	1,015,350
小田郡	1,450,000	507,500	1,280,000	473,600	1,285,100	295,650	1,808,830	703,994	2,080,224	515,898
後月郡	200,000	70,000	107,000	34,240	107,000	25,680	277,000	108,050	332,400	84,430
吉備郡	170,000	59,500	90,800	32,688	93,500	32,725	334,000	133,600	400,800	91,212
上房郡	200,000	90,000	200,500	136,340	200,500	140,290	227,200	113,600	253,327	127,550
川上郡	95,000	33,250	30,000	1,080	30,000	15,000	62,000	31,000	69,440	28,852
阿哲郡							520	202	624	187
真庭郡	2,500	875	3,700	1,665	3,700	1,036	442	172	442	133
苫田郡	10,000	3,500	5,500	2,380	3,500	980	468	182	562	169
勝田郡							552	215	602	181
英田郡	2,000	700					120	47	132	40
久米郡	5,000	1,750	1,700	68	1,700	476	230	90	253	76
合計	5,075,750	1,796,513	4,205,925	1,552,334	4,218,825	1,268,791	6,385,507	2,523,658	7,354,425	1,995,591

注)『岡山県統計書』より作成した。明治33年に郡が統合され、明治36年から麦稈・経木・麦稈経木が記載されその合計を掲げた。

り」(260ページ)。「外国貿易ノ盛衰如何ニ依リ消長ヲナスモノナルニ目今未外国市場ニ対スル知識ノ欠如セル」ことが問題であると指摘し、さらに「岡山県ニ於ケル麦稈真田、花莖工場ニ於テ製品ノ売行ノ好況ニシテ職工ニ不足ヲ告クルノ時ハ概ネ職工ヲ香川地方ニ募集スルヲ常トセリ」(275ページ)とし、甘言・欺瞞等の手段で連れてきた者の紛議が多発している様子が記されている。ここでも工場生産よりも農家の家内副業として発展した麦稈真田業の姿が確認できよう。事実、この期の工場については、表11に示した通り、極めて少ない。

明治31年の『岡山県第二十一回農商工年報』にも麦稈工場として浅口郡黒崎村若狭恵津次郎経営の麦稈工場(職工 男10, 女15人)、浅口郡寄島村田川松次郎経営の寄栄社(職工 男150, 女70人)、上房郡松山村原田伊之助の原田麦稈製造所(職工 男10, 女110人)の3工場が記載されているに過ぎない。また、岡山県内務部『岡山県産業要覧』(大正4年)によれば、経木真田の生産は、備後福山の商人が上房郡成羽町に工場を建設し、白揚樹を原料に経木を製造し神戸の商館に販売したが、2ヶ月で閉鎖した。その後福山の藤原保太郎が成羽町に工場を建設し、原田伊之助に経木真田を販売した。これが岡山県における経木真田の起源であり、その後麦稈と経木を混成する真田が案出され、この混成真田が岡山県の特徴の一つになる。表12は、明治38年における上位10県の麦稈真田生産量と価額を示している。見られるとおり、この30年代は、香川県の麦稈真田生産の発展がめざましく、岡山県に急迫する勢いであった。量的には岡山県が香川県を凌いでいるが、価額では香川県がはるかに凌いでいる。優良品種の製造は香川県のほうが多

表11 麦稈真田の工場

工場名称	製造品種	所在地	持主	創業	職工
誠忍社	麦稈真田	邑久郡鹿忍村	岡 円吉	M29.7	男3 女8
原田商会	麦稈真田紐	上房郡松山村	原田伊之助	M20.3	- 51
内田経木製造工場	経木	川上郡成羽村	内田常太郎	M35.4	13 0

注)農商務省商工局工務課『工場通覧』(明治36年)

表12 麦稈真田生産・普及（明治38年）－上位10県

地方	製造戸数	職 工			麦稈真田		経木真田		麦稈経木交真田		価額計
		男	女	計	数量反	価額 円	数量反	価額 円	数量反	価額 円	
計	77,877	62,441	219,830	282,271	11,275,066	3,215,217	5,413,842	2,080,335	531,223	131,022	5,426,574
香 川	19,165	19,230	62,238	81,468	3,567,810	1,393,878	425,664	240,811	3,113	1,879	1,636,568
岡 山	27,796	29,843	65,858	95,701	5,672,118	1,252,858	555,779	216,753	472,479	101,631	1,571,242
愛 知	3,593	335	10,371	10,706	717,017	213,402	318,058	133,773	11,795	5,461	352,636
広 島	6,035	2,811	8,443	11,254	732,429	154,928	302,295	77,268	3,563	1,227	233,423
千 葉	2,891	303	3,959	4,262	197,563	68,046	-	-	-	-	68,046
山 口	5,812	302	15,732	16,034	155,928	59,189	418,480	199,644	5,304	1,578	260,411
愛 媛	19	46	809	855	67,187	22,862	7,128	3,906	-	-	26,768
熊 本	1,737	278	2,454	2,732	59,835	16,564	1,260	550	-	-	17,114
和歌山	10	22	747	769	18,600	10,600	3,305	1,158	-	-	11,758
兵 庫	29	199	1,605	1,804	28,249	9,924	152,495	51,764	30,199	18,109	79,797

注) 『第22次農商務統計表』より作成。

くなったことを示している。香川県から多くの組子が岡山県に移住したが、彼女達が帰郷後に果たした役割が大きかったと言える。

(4) 博覧会、共進会など

麦稈真田業の普及には、博覧会や共進会などのイベントが重要な役割を有した。明治28年の「第四回内国勸業博覧会」¹⁹には第一部工業の第八類木竹類製品 其七に「竹、麦稈、藁、籐、籐、杞柳、蘭、棕櫚毛、羊齒草等」の製品中、麦稈組紐で備中国浅口郡寄島村斎藤寿太郎ら、麦稈真田の部に上房郡松山村原田伊之助ら10組が出品しているし、明治36年の第五回内国勸業博覧会では、一等賞に同じく原田伊之助、笠岡町野澤組支店の田中 連が受賞し、二等賞12名、三等賞72名、褒状371名など多数の受賞者を数えた。また、明治31年兵庫県で開催された第六回関西連合府県共進会では、麦稈真田（第17類）審査員4名のうち蔦川喜平、原田伊之助（他2人は兵庫県）が選ばれ、原田伊之助・村上森造出品の麦稈真田1反が宮内省御買上となった。一等賞27人には、岡山では原田伊之助が、二等賞7人のうちに岡山から蔦川喜平 斎藤寿太郎 川口国松 亀山富太郎の4人が入賞した。この共進会にはスイスの麦稈真田類が展示・販売され、優秀な本場製品として参考に供された。審査官は農商務技手 金子篤寿で、その審査報告（抄録）は以下の通りである²⁰。

「今回麦稈真田ヲ出品シタルハ京都、大阪、兵庫、滋賀、鳥取、岡山、広島、山口、和歌山、香川、愛媛ノ二府九県ニテ出品人員六百三十九名其出品一千七百八十八点ノ多キニ達シ岡山県ノ出品最多数ヲ占メ本会麦稈真田出品総数ノ六割強ニ当レリ香川県之二次ギ広島兵庫滋賀ノ三県又之二次ギ其他ノ府県ハ出品少数トス出品の重ナル種類ハ七角、五角、四菱ニシテ七角最モ多シ而シテ曲打ノ如キハ少数ナリ今回優等ナリシハ岡山県ニシテ広島兵庫ノ二県之二次ギ山口香川ノ二県又之二次グ、欠点「粹尺不定」→「海外ニ在テ我麦稈真田ノ信用ヲ墮スコト甚大」、「上底品位ノ不同ノ粹卷ニテ出品」、光沢の悪い物、組み方は進歩が見られるが、「意匠ニ至テハ斬新ナルモノ殆ト無ク」「着色ハ別段ノ進歩ヲ見ズ」（中略）

「岡山県」

本県ハ麦稈真田業旺盛ノ地ニシテ本邦ニ冠タリ本業ヲ開始シテヨリ茲ニ二十有余年其間駿々乎トシテ進歩シ海外輸出益々多キヲ加ヘ近来ハ年産額六七十万円ヲ降ラズ昨明治廿九年五月小田郡笠岡町ニ五二会麦稈真田共進会ヲ開設シタルヨリ以

19 『第四回内国勸業博覧会出品部類目録』（明治28年、事務局）

20 明治29年『麦稈真田業調査報告』（私立兵庫県勸業会）

来当業者大ニ奮励セリト云フ然レドモ出品ノ一般ヲ視レバ進歩シタルト謂フ可ラザルモノアリ特ニ笠岡町ノ如キハ昨年ハ割合ニ優位ヲ占タルモ本年ハ浅口、上房二郡ニ比スレハ少シク劣レリ川上、後月其他ノ郡ハ稍進歩ノ状況ヲ呈セリ今回出品シタルハ四百十二名ニシテ本会麦稈真田出品惣人員ノ六割強ニ当リ出品数一千〇八十八点ニ達シ五平百八十六点七平十点四菱二百四十二点五角百五十三点七角二百一十一點寢角三十五点蛇角、曲打、浪打、山葵打、扇子打等百三十一點アリ岡山市及御野、津高、赤阪、和気、児島、浅口、小田、後月、賀陽、下道、上房、川上、阿賀、西北条十四郡ノ出品ニ係リ浅口郡最大数ヲ占メ小田、上房、川上ノ三郡之二次ぎ後月、下道其他ノ緒郡市ハ出品多カラズ

万国博覧会への出品やその視察に関しては、『岡山県真田同業組合沿革史』に、セントルイス万国博覧会（明治37年）、翌年ベルギーのリエージュ万国博覧会、明治42年アメリカ沙市（シアトル）太平洋博覧会、43年ロンドン博覧会出品などが記されている。この他、時代はやや下るが、学校でも講習会や競技会が開かれ、子どもから大人まで簡単に稼げる産業として普及していった。以上のように、同業組合はもとより問屋、仲買人、製造業者まで情報が伝達され、重要輸出品として発展した。

3. 明治末期から大正期の生産と流通

(1) 戦争の影響

日露戦争開戦の明治37（1904）年には、麦稈真田12,499,000束5,165,612円、経木真田3,060,000束1,336,826円の生産量・価額であったが、翌年より不況期に入り価格が低落した（表2参照）。貿易では、明治41年を境にアメリカ向け輸出がイギリスを抜いて再び第1位となり、以後ヨーロッパ向けの輸出が減少する。とりわけ大正3年から始まった第1次世界大戦により、オーストリア、ドイツ、ベルギーとの国交断絶があり、大正1年6,633,736円が大正3年には2,612,783円（総合計）へと約5分の2に減少した。「本年ノ輸出額ハ前年ニ比シ、全国当港共五百七、八十萬ノ減少ヲ示シ、不況ヲ呼ヒタル昨年以上ノ悲況ヲ表示スルニ至レリ」（『外国貿易概覧』大正3年の項）とし、その原因としては新製帽材料の考案、「戦禍ノ余波ヲ享ケ各国ノ需要一時杜絶」したことなどが挙げられた。この年の英国向け真田の輸出は、日本54.0%、スイス13.8%、清国8.8%などとなって日本産が半数を占めた。翌大正4年は、フィリピン、オーストラリアが増加したものの、アメリカ、イギリス、フランスに集中することになり、不況は一層深刻であった。

この年の日本での麦稈真田の上位9県は表13の通りである。総価額ではマニラ麻が87%を占め、麦稈真田11%、経木1.5%、麦稈経木交真田が0.7%。麦稈真田は岡山県49%、香川県33%、広島県12%でこの3県で約96%を占める。経木真田では山口、愛知、広島が、麦稈経木交真田は福岡県が94%を占め、マニラ麻は神奈川、東京、兵庫、石川、愛知、静岡が上位を占めている。

この時期の岡山県における麦稈真田生産について表14で見ると、明治38年670万反157万円が41年には生産量が増加しているにもかかわらず価額は減少している。大正に入っても低価格が続き、第一大戦期間の大正4（1915）年は大正1年の3分の1ほどに激減する。この後大正5年から景気が回復し大戦景気となり、大正8年に生産量1200万反価額635万円とピークを迎える。

しかし、大正9（1920）年は大戦景気が終わり一転して「戦後恐慌」に陥った。翌年の価格は155万円ですべて約7分の2に減少、以後は後退・衰退の一途を辿ることになる。

(2) 日本一の産地岡山県の状況

六条院村は、浅口郡内でも隣村寄島村と並んで麦稈真田業の最も盛んな地域であった。明治44年「稟申控」²¹によれば、浅口郡農会の依頼で「農家々庭調査ノ件」がなされたが、その中で明治40年から43年ま

21 『鴨方町史 資料編』（平成5年）748ページ～

での4年間の生産戸数、従業員数、販路、生産高、生産価額が書き上げられており、930戸、2600人、欧米各国、303,000反、45,400円（明治43年）となっている。「イ 沿革 明治二十五年頃ヨリ従事スルモノアリ、同二十八年頃ヨリ盛大トナル ロ 現況 村内各戸殆ト生産セサル家ナク、農家収入ノ殆半ヲ占ム（中略）ニ 販売方法及消費状況 トンビト称スル出買人、毎日各戸ニ就キ買集メ、問屋ト称スル買店ニ売込ミ、神戸・横浜ノ貿易商ヲ経、海外へ輸出」と報告している。明治44年12月1日付で岡山県麦稈同業組合員によって「六条院村麦稈真田製造共同販売組合」が設立され、規約が作成されている。また、この村の年度末に村会に報告された「事務報告」は極めて詳しい内容となっており、「勸業ノ部」で麦稈真田業について詳述している。例えば、大正2年には「客年晩秋ノ頃ヨリ麦稈真田組ハ漸次不況ニ沈淪シ、歳末ニ至リテハ遂ニ価格ノ低落ト同時ニ其取引ハ殆ト廃絶」「問屋業者ハ俄然店舗ヲ閉鎖」「一般ノ副業ハ勿論村ノ財政」にも影響すること、大正3年「客年末欧州戦乱ノ影響ニシテ現下殆ト廃絶」、大正4年「客年欧州戦乱以来麦稈真田ノ不況ニ沈淪」、大正5年「欧州戦乱勃発以来久シク不況ニ陥リシ麦稈真田紐モ、漸次其価格騰貴シ来リ、之レカ取引亦盛況、昨秋ノ如キハ近来稀ニ見ル好況ヲ呈シ、為メニ米麦ノ豊作ト相待（俟）テ農家経済ヲシテ潤沢ナラシメタ」、翌6年は「米作ノ凶作」にもかかわらず農家経済は潤沢、などの報告が続く。大正9年「麦稈真田ハ、前年ノ盛況ニ反シ昨春四月頃ヨリ非常ノ暴落ヲ呈シ」取引閑散、問屋休業、製産家「殆ント休止ノ状態」、「米麦価格モ亦漸次暴落」農家経済「悲惨ノ状態」となっている。以後の報告も大同小異であるが、それでも大正13年の報告では、米133,955円に対し麦稈真田は84,000円の収入となっており、麦56,983円より27,000円ほど高い収入を挙げている。

さて、岡山県は大正9年の「戦後恐慌」を契機に「産業基本調査」を実施し、副業調査を含め極めて詳細な報告書を作成した。その副業を見ると、従業員数で最も多いのが麦稈真田で全体の45.3%、価額の30.5%を占めている。藁工品、林産物、藁製品が続くが、後退・衰退するとはいえ麦稈真田の重要性は決して低くないのである²²。

寄島村でも表15に示した通り、95%以上の戸で製造しており、大正8年のピーク時には職工7,567人が64万反40万5,000円を稼ぎ出している。しかし、翌年には46万8,000反29万円に低下、さらに大正10年には職工数も激減し2,644人、26万7,000反弱84,400円にまで減少しており、大打撃を蒙ったことが分かる。輸出品たる麦稈真田は、流行の移り変わりの早い帽子製造の原料・半製品だけに世界的な経済の動向や流行に左右されやすい産業であった。

表13 麦稈真田製産・普及（大正4年）

県名	製造			職工				麦稈真田				経木真田				麦稈経木交真田				マニラ麻真田				計	
	戸数	男	女	計	数量束	価額円	%	順位	数量束	価額円	%	順位	数量束	価額円	%	順位	数量束	価額円	%	順位	数量束	価額円			
計	93,176	40,182	145,273	185,455	8,826,700	1,053,230	11.2		2,345,414	142,128	1.51		377,090	68,964	0.73		31,666,331	8,178,809	86.6		43,216,144	9,443,131			
岡山	32,204	28,740	55,337	84,077	4,145,618	520,542	91.6	1	298,343	15,679	2.8	4	500	100	0.02	4	136,886	31,994	5.6	21	4,581,347	568,315			
香川	54,044	5,577	51,047	56,624	3,135,981	351,129	96.7	2	194,238	10,224	2.8	6					8,000	1,600	0.4	28	3,338,219	362,953			
広島	2,991	3,306	12,252	15,558	1,217,218	137,322	59.5	3	421,911	18,015	7.8	3		-			382,350	75,430	32.7	16	2,021,479	230,767			
愛知	1,202	618	2,845	3,463	238,340	30,750	5.4	4	513,500	30,850	5.4	2	26,670	2,600	0.5	2	2,112,223	504,010	88.7	5	2,890,733	568,210			
愛媛	215	6	449	455	55,200	6,420	2.0	5	12,000	540	0.2	11					1,400,666	310,910	97.8	7	1,467,866	317,870			
福岡	789	174	1,889	2,063	15,613	2,413	3.6	6	4,762	264	0.4	13	325,120	65,024	96.0	1	-	-			345,495	67,701			
大分	152	50	641	691	10,435	1,778	100.0	7	-	-							-	-			10,435	1,778			
高知	294	20	455	475	4,704	1,320	369	8	15,340	2,256	63.1	10					-	-			20,044	3,576			
長崎	2	3	36	39	2,160	1,259	15.7	9	400	41	0.5	17					24,000	6,720	83.8	25	26,560	8,020			

注)「第32次農商務統計表」より作成した。%は各府県種類別真田の価額構成比である。

22 拙稿「近代岡山県地域の農家副業について－『岡山県産業基本調査書』を素材として－」（『岡山大学経済学会雑誌』第40巻第4号2009年3月を参照。

表14 岡山県麦稈真田の生産 (M38-T10)

年次	M38		M41		T 1		T 4		T 8		T 9		T10	
	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額	数量	価額
岡山市	3,530	1,106	2,000	260	1,307,400	121,860	83,415	17,429	140,000	62,400	84,000	46,496	3,500	770
御津郡	2,150	658	1,000	100	460,880	43,773	1,956	118	867	78	6,384	1,555	700	154
赤磐郡	25,485	9,939	1,000	100	90,890	9,834	7,450	352	8,400	4,200	8,000	1,280	1,000	110
和気郡	70,970	27,678	7,000	910	354,410	38,346	9,100	436	59,900	7,188	32,100	6,576	2,500	630
邑久郡	57,500	13,335	30,000	5,475	54,500	10,781	6,288	668	70,000	35,000	110,000	70,400	19,800	5,940
上道郡	10,743	4,190	3,000	435	50,000	4,500	1,600	75			3,000	1,920	6,000	1,800
児島郡	165,100	34,671	67,520	12,153	203,700	57,420	48,000	5,200	240,650	144,390	172,696	115,708	69,760	16,045
都窪郡	59,460	12,487	45,226	8,140	300,310	37,720	24,000	2,600	106,400	63,322	94,870	63,357	32,940	7,948
浅口郡	3,433,227	728,548	3,721,580	675,184	6,047,903	1,279,273	2,711,754	346,459	6,808,685	3,631,316	4,512,317	2,679,697	4,091,365	1,103,600
小田郡	2,020,994	438,923	1,448,358	251,427	3,125,220	607,366	1,024,546	120,545	2,805,902	1,517,867	2,441,328	1,778,929	1,167,029	321,269
後月郡	242,170	61,636	252,342	50,468	1,037,515	174,043	182,782	13,860	591,599	453,699	379,083	113,625	96,809	38,724
吉備郡	149,275	38,708	337,178	64,620	823,760	108,624	157,845	17,971	560,500	273,320	408,900	266,221	120,000	40,000
上房郡	329,400	150,074	615,690	95,037	2,177,475	268,150	187,599	35,233	280,922	90,475	261,576	114,625	13,700	8,090
川上郡	89,000	34,336	217,600	27,443	1,425,000	147,420	69,025	3,589	108,200	32,107	107,845	23,105	4,968	1,034
阿哲郡	14,000	5,460	10,000	1,200	511,650	50,785	4,550	227	30,000	4,051	13,860	1,940	1,300	130
真庭郡			60,110	7,213	880,120	88,462	27,250	1,133	46,197	6,674	59,059	9,040	5,900	590
苫田郡	20,370	7,728	80,200	9,624	510,000	48,459	33,112	2,322	135,146	16,530	90,617	13,914	21,000	3,360
勝田郡	4,902	1,216	1,000	100	12,000	1,140								
英田郡	900	261	1,000	100	5,200	520								
久米郡	1,200	288	1,500	200	150,000	14,250	1,875	78	42,157	11,739	39,016	13,839	1,300	176
合計	6,700,376	1,571,242	6,903,304	1,210,183	19,617,933	3,112,717	4,581,347	568,315	12,035,525	6,354,356	88,243,715	5,322,247	5,659,571	1,550,370

注) 各年『岡山県統計書』により作成。単位：反、円

表15 麦稈及経木真田紐 (寄島町)

年度	製造戸数	麦稈真田			麦稈原料		現住戸数
		職工	数量	価額	数量	価額	
大正 1	1,388	7,780	433,000	139,930		1,400	
大正 2	1,388	5,552	1,234,000	209,780		1,390	
大正 3	1,348	5,510	681,450	102,217		1,398	
大正 4	1,298	5,321	584,300	90,567		1,386	
大正 5	1,330	7,973	657,020	131,404		1,395	
大正 6	1,331	7,975	658,845	184,487		1,374	
大正 7	1,334	7,976	594,730	231,944		1,405	
大正 8	1,402	7,567	642,082	405,150		1,408	
大正 9	1,396	7,536	467,710	289,980		1,414	
大正10	1,322	2,644	263,775	84,408		1,395	
大正11	1,340	2,680	272,520	95,382	28,000	19,600	1,388
大正12	1,342	2,675	309,160	125,519	25,000	17,500	1,375
大正13							1,387
大正14							1,376
昭和 7			91,440	17,308			1,494
昭和 8			159,940	34,427			1,509
昭和 9			124,085	32,686			1,525
昭和10			90,100	15,858			1,598

注) 1. 寄島町『現勢調査簿』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲによる。空欄は記載がない。

2. 単位：大正10年までは反、以後は束。昭和7年以前は戸数、以後は世帯数。

(3) 麦稈真田の収支計算

神立『近代日本における麦稈真田業』には、一戸清方『麦稈真田製造法』(1906年)に示された愛知県と商工研究会『家庭小工業』(修文館, 1916年)の香川県について麦稈真田の収支計算例を検討し、「麦稈真田用麦栽培をし、その麦稈で麦稈真田を製造することがその農家にとって非常に有利な営みであるかを示している。麦稈真田収入の多くは自家労賃相当分であり収益ではないがこれこそ農家副業の特質であるとしている。」「支出に小作料がある小作農家についてであるが、これは小作農家においても麦稈生産が大に行われていたことを示している。」(同書78ページ)と的確に指摘している。

岡山県で参考となる史料を農商務省商工局『重要輸出品 後編』（明治41年）から示しておこう。「紐ノ種類ト時期トニヨリ一定シ難キモ普通品（四菱）ヲ標準トシテ麦稈真田紐ニ就キ計上」すると、原料代（1反につき）0.125円、晒賃0.005円、撰別賃0.031円、種別賃0.010円、組賃0.060円、仕立賃0.05円、計0.236円、収入は0.230円、差引0.006円の損失となる。しかし、「多数ノ製造者ハ自己製産ノ原料ヲ以テ製造スルト及労働賃ハ全ク自己ノ収入ニ属スルトニヨリ相当ノ収利アルカ如シ」と解説している。また、『副業経営の実例』（大正13年）には、香川県綾歌郡の農家（家族9人、耕作反別田1町3反歩、畑2畝歩、耕牛1頭）の事例が紹介されており、副業で麦稈真田を組むのは娘3人、「春夏秋冬ヲ通シテ余暇アラバ直ニ従事」、自家製産の麦稈を使って組む。1ヶ年430反、230円、硫黄及検査手数料として20円が経費としてかかるが差引218円の収益となる。販売は、販売所に仲買人が来て購入する、というものであった。『頌徳積善の人村上森造翁』には、夏休みの児童に、低学年は三平、3・4年生は四菱、高学年は五菱1反を課し登校日に持参させた。学校競技会では、「直ぐ組めるように枠で繰り、柔らかくした藁を濡れタオルで包み学校へ持参し」速さと製品の出来具合で表彰者が決まったことが報告されている。

以上、麦稈真田が農家の家計に重要な意味を有していたこと、幼老男女を問わず簡単に製産できしかも相当の収入となったことが農家副業として、急速かつ広範囲に拡大した理由であった。

おわりに

2016年8月、岡山県立博物館で真田組紐製造の実習会が開かれ、浅口市鴨方町の経験者から組み方の一端を教わることが出来た。この企画は、浅口市教育委員会事務局文化振興課埋蔵文化財専門委員の水田貴士と県立博物館学芸員野田繭子氏の協力によって実現したもので、麦稈真田に関する見聞を広めるいい機会となった。また、寄島町調査では寄島町図書館長の原田建次氏にお世話になった。寄島町の秋田森三氏には、明治26年作成の帳面（長帳）と帽子製造現場を見学させていただいた。井上弘氏には写2の「組合員之証」を提供していただいた。この紙面を借りて感謝申し上げる次第である。今回は輸出用真田を取り扱ったが、大正期に林立する製帽工場に関しては後日を期したい。また、戦後の麦稈真田業についても課題として残る。